

會



報

1966年4月

250

日本山岳会

会報二五〇号に思う

松方三郎

会である以上会報がなければならぬ。「山岳」はあるが、会員に対して会の動きをその都度報告するためには、もっと身軽な、そしてもっと頻繁に出せるものが欲しい。ことに地方在住の会員の立場を考えれば、一層そうしたものを考える必要がある。こんな考えから会報発刊の提案が出たのであった。

今から見れば何の変哲もない話だ。当り前のことをやっただけのことだが、それだからこそ、代々受け継がれて二五〇号までになったのだらう。そしてわがJACと共に、いつまでも続いて行くにちがいない。「山日記」の第一号の出たのも同じ昭和五年だが、思えば虎の門時代は、それなりに、会の歴史に残るようなことをいくつか始めている。海外遠征といったような目覚ましいことではないが、会として事務局や集会所を持つとか、図書室をもつとか、今日の会の基礎固めのための、極めて意義の深い活動に手を付けている。

年後の今日開いてみて興味津々たるものがある。

最初の二年は浦松君の編集、三年目が角田吉夫君に神谷さん、四年から六年まで額田敏君が編集の中心で、それに列んで福島昌夫、逸見真雄、桜井信雄三君の名が出ている。桜井君を除いては、今日では会の集りなどで顔を見ることも少ない諸君だが、それ／＼に健在である。

昭和五年から数えれば三五年以上になる、会報が毎月出ていれば五〇〇号を越していなければならぬが、事実はその半分にも及ばない。途絶えていた時代もあり、隔月になったり不定期になった時代があるからだ。それだけに、そうして内外の事情の変動をこえて来たわが会報の値打は、一層貴いといわねばなるまい。

会報は現在では毎月出ている。編集者の苦心たるや察するに余りあるが、会の財政の上でも、その印刷や発送のための支出は、相当な部分を占めるに至っている。しかし、いくら金がかかっても、会報発行は何とでも続けて行くべきだと考える。クラブとしてのJACにとって、会報は何にもまして大きな役割を果たしているからだ。

毎月出て行くと十年で二二〇号づつ増える。そしてJAC創立八〇年目には五〇〇号になる。遠い夢のような話だが、今会報が二五〇号になったという事実も、そうした遠近法の上において眺めてみると、なかく生易しいことではないと、つくづく思うのである。

この機会に歴代の会報編集責任者に心からの感謝を献げる、など、あらたまるのもどうかと思うが、この点で、会員一人々々の気持は、みんな同じだと思う。

× × ×

目次

会報二五〇号に思う	松方三郎	一
会報の魅力	島田 巽	一三
山川黙君と私	武田 久吉	二二
山川黙氏略歴	山崎 安治	二二
ヒマラヤ財団	田中 栄蔵	三
想 随		
日本のアルピニズム(完)	安川 茂雄	四
他山の石	Y・M	三
北の山・南の山		
のぼらなかった山	日高信六郎	五
果 無 山	古沢 肇	五
研究		
愛鷹山の山名	田畑 真一	六
槍ヶ岳の文献解題Ⅲ(完)	山崎 安治	六
海外遠征報告		
同志社隊・アンデスⅡ(完)	江上 康	四
中部チリⅠ	久野英一郎	八
会員岳友通信		
望月達夫・深田久弥・金山淳二・原 真		一
志川輝夫・友田彦士		一
中部ネパール隊・橋村一豊		一三
海外情報		
ラジスタン・サウスジョージア・南極		一二
コーカサス・ヒンズー・クシネ		一二
日本山岳協会への加盟経過報告	東京支部	九
図書紹介		
諸会合(14)海外新着雑誌(14)計報(15)		一六
四〇年度受入図書(17)会務報告(16)		一六
新入会員		一八



☆☆☆☆



山川黙君と私

武田 久吉

本会発起人の一人である山川黙君からは、永らく消息がないので、いかが消光して居られるかと思ひ乍ら、日を送る内に、他界の通報を得て、驚いたことであつた。

山川君は旧姓河田、五人兄弟の二男坊であつた。長兄は烈君、私と中学の同窓であつたが、方面が違つたため、中学卒業後は、数回河田君の家で偶然会つただけに止まつた。黙君に初対面は、明治三十六年(一九〇三年)一月十一日、日本博物学会同志会第三回談話会の席上で、この折には先年物故された高野君とも、亦山岳会発起人の一人であつた梅沢親光君とも顔を合せたのであつた。

その頃山川君は、熱心な植物採集家であつたので、その前年の八月十日東京を出発して、甲斐の金峯山に採集を試みて居る。

三十六年の春五月三日には、共に高尾山に採集したが、夏には、私の誘ひに乗って、七月の下旬に八ッ岳に採集旅行を企てた。その

時の記事は、山川君の筆により『博物之友』第四巻に掲げられ、八ッ岳の紀行は、『山岳』第一年第一号に詳しく報告されている。翌年の七月中旬、私達二人は戸隠山と妙高山に登つて植物を採集し、その紀文は『博物之友』第五年に、共同で執筆した。

明治三十八年四月一日から、日本博物学会同志会の催で、日原から仙元峠を越して浦山に下り、秩父大宮に出て泊り、翌朝節分草を得んがために妻坂峠に向つたが、山川君も行を共にした。この年の八月初め、私達二人は、白馬ヶ岳に採集を計画し、同じ日に東京を出発し、私は途中権現岳に登り、山川君は金峯山に登つた。二人は上諏訪で合流し、塩尻峠を徒歩で越え、散々苦心の末白馬山麓の四ツ屋に達した。その記事の前半は、『山岳』第一年に掲載してある。河田が山川と變つてからは、登山はあまりされないように承知している。

山川(旧姓河田)黙氏略歴

(会員章番号七)

- ・明治十九年七月二十六日東京に生まれる。
- ・明治三十四年七月、日光奥白根山登山。
- ・明治三十五年八月、富士山、金峯山登山。
- ・明治三十六年七月、八ヶ岳。同年八月、浅間山登山。
- ・明治三十七年三月、東京府立第一中学校卒業。

- ・明治三十八年八月、白馬岳、杓子岳、鍾ヶ岳登山。
- ・明治三十八年十月、同志七人と共に日本山岳会創立。
- ・明治三十九年八月、木曾駒ヶ岳、御岳、乗鞍岳登山。
- ・明治四十年八月、甲斐駒ヶ岳、地藏岳、鳳凰山登山。
- ・明治四十一年八月、燕岳、大天井岳、常念岳、槍ヶ岳、笠ヶ岳、前穂高岳登山。
- ・明治四十二年七月、第一高等学校卒業。
- ・明治四十二年八月、塩見岳、仙丈岳登山。
- ・大正二年七月、東京帝国大学理科大植物学科卒業。
- ・大正二年七月、針ノ木岳、蓮華岳、赤牛岳、黒岳、鷲羽岳、ワリミ沢下降、東沢乗越より中房に到る。
- ・大正四年八月、立山、薬師岳登山。
- ・大正五年八月、北岳、間ノ岳、農鳥岳縦走。
- ・昭和十年十二月、日本山岳会名誉会員に推薦される。
- ・武蔵高等学校(旧制)教授、同校々長を歴任される。
- ・山川への主な寄稿
 - ・信州八ヶ岳(一ノ二)
 - ・白馬麓城記(一ノ二、三)
 - ・赤石岳果して赤岳より望み得るか(三ノ一)
 - ・秩父の一角(三ノ二、三)
 - ・日本アルプス中央部横断の旅行談(三ノ三、四ノ一)
 - ・金峯山御室および駒ヶ岳屏風岩岩小舎の焼失(三ノ三)
 - ・三峰川の土流(荒川岳および仙丈岳に登る記)
 - ・間ノ岳より北、野呂、田代河川の分水嶺について(五ノ一、六ノ一)
 - ・信州甲斐境ノ一部(七ノ一)
 - ・白峰付近につきて(七ノ二)

- ・鉢伏山について(七ノ三)
- ・白峰各座の名称について(八ノ一)
- ・鋸岳付近の甲信境(八ノ二)
- ・主な著書
 - ・原色高山植物(昭和三年、三省堂)
 - ・原色貝類図(昭和三年、三省堂)
 - ・原色蝶類図(昭和四年、三省堂)
- ・ペルー・アンデス(1965)
 - II (Peruvian Times—Sept. 10, 1965, 資料提供、江上康氏)
 - 一六 関西大学(杉原弘人)
 - ・Santa Rosa E. (5578 m, 初登)「その後」Irishanca, Yerupaja, Siula Chico など踏査。
 - 一七 アルゼンチン隊 (José Luis Fontouge)
 - 隊長はバタコニアの FitzRoy 登頂者 Yerupaja S. (6515 m) を南東水壁より新登頂、そのあと Siula Chico を試登。
 - 一八 アルゼンチン・オーストリア合同隊 (Gerardo Watzl)
 - 隊長はタウラギリーの経験者。
 - Yerupaja, Siula Chico の東面試登
 - Cordillera Volcanica
 - 一九 イタリー山岳会 (Mario Fanfani)
 - 隊長には山岳関係著書多し。アマンソ源流の最奥にある諸火山を探る (Coropuna, Ampato, etc) Cañon de Cabanande, Coropuna, Apurimac の源流 Andahuay 溪谷などの略図作成。
 - Cordillera Vilcabamba
 - 二〇 同志社大隊(江上 康)
 - Incahuasi (5000 m), Salcantay (6200 m), Salcantay E. Qisur (5770 m) Peaks of Mellizos (5000~5410 m), Cima Roca (5000 m), Nevado Blanco (5250 m) などの後ウルバンバ及びウカヤリ河をコムボ

「付記」登山略歴は私が会報を編集していた当時、昭和三十六年四月四日付で山川氏よりいただいた御返事にもとずいたもので、「あまり登っていませんが二五〇〇メートル以上のものだけ挙げます」と注記されている。(山崎)

トビ下降。

Cordillera Vilcanota

- 二一 立教大隊(瀧口義弘)
- Colque Cruz (6111 m), Huayna Alpamayo (5800 m), Zapato (5800 m), Jatunriti (6000 m) など登る。
- ・後「Ayacachi, Coylloriti の東斜面を探る」。

Cordillera Carabaya

- 二三 英国隊 (James Whitaker, Rodney Gallagher)
- 植物及び鉱物調査のため、クスコ南部に位置するカラバヤ山群を踏査。
- Cord Pelagatos Rosko

- 二三 英国隊 (Patrick M. Holligan)
- ・ランカ北方の Pataz 地方、ロスコの山群は前記第四の上智大隊参照。
- ・英国隊(劍橋大学)は、同地方の植物調査「会報」二四六号参照。(以上)



New Zealand Andes というのは、正確には何処にあるのですか? —L.E.W. 著より—



ヒマラヤ財団

田中栄蔵

本会は昨年六〇周年を迎えた。お目出度いことである。だが後世に残るような事業はなかった（日本山岳協会の準備は大事業の端緒ではあったが）。この点については、会の性格もさることであるが、会員として反省させられることである。七五周年までには、まだ間があるが、掲題についていささか私見をのべて置きたい。実はこの提案もすでに時機を失しているかも知れない。不言実行がこの国の格言ではあるが……

一見はなやかな遠征や探検も、その渦中にあれば大変なことである。事務局の繁忙さと苦しさは、山に登ることよりも苦しいといわれる。ましてその実際の台所となると、まさに火の車以上のものであろう。少し目鼻がつくと、後援会というものをものとも、財政面を確実に掌握し、遠征が可能かどうかの見当をつけるために、先輩連が行っているようである。現在

のわが国では、探検や遠征においてそれと金の都合のつく国柄ではない。遠征もピンからキリまであり主旨としては結構でも、財布の紐はかたい。そこで遠征基金を貸しにくれたり、融通または援助をしてくれる財団が生れれば、遠征の仕事は大部軽くなるし、見透しに明るさを増し、可能性が出てくる。財団もよい遠征を援助し成果が上れば、本来の使命を達成し貢献したことになり、存在価値は大い。こうした機関はのぞまれながら生れない。いや創立させる努力がたりない。

も加えられているときく。

- 2 スイス山岳研究財団で、一九三六年頃スイス山岳会の中の Stiftung für alpine Auslands Expeditionen / Zürich が発展し、一九四六年創立、遠征数も多く、国際的である。機関誌 The Mountain World は周知の通り。
- 3 スイスヒマラヤ財団、内容はよくわからないが、一九六三年創立、同年アイゼリンのヒンズークッシュ遠征（ウルグェント初登頂）を援助している。
- 4 ニュージーランドのエヴェレスト遠征を記念し、同国山岳クラブ連盟が管理をしている。当初基金五〇〇ポンド。
- 5 一九三六年ヒットラー時代メルクル等の遭難を端緒としてドイツ国体育部内に設けられた。だがその後の経過は華々しくない。
- 6 ENH or Research Scheme Nepal Himalaya は Fritz Thyssen Stiftung が支援者となり行っている調査計画である。しかしその学術報告は予報をみても素晴らしい

1. Mount Everest Foundation.
2. Schweizerische Stiftung für Alpine Forschungen / Zürich.
3. Schweizerische Himalaya-Stiftung / Luzern.
4. Hillary-Lowe Everest Fund. Wellington, New Zealand.
5. Die Deutsche Himalaya-Stiftung.
6. Forschungsunternehmen Nepal-Himalaya / München.
7. Österreichische Himalaya-Stiftung.
8. Indian Mountaineering Foundation.
9. Himalayan Mountaineering Institute.
10. Western Himalayan Mountaineering Institute.

7 詳細について未調査

8910 インドのもので、戦後に創立された。所在地はニューデリー、ダーズリン（この中には、The Jayal Memorial Fund がある）、マナリ。

こうした財団は法人であることだ。深田さんは、日本からヒマラヤ遠征をした人が一人一万円拠金すれば出来るだろうといっていた。

財団であるから基金もさることながら、これを運営する人と組織が一層重大である。運営体系を科学的に造りあげることが先決で、姿だけを作ることは反対である。

外国ではこの種の創立と管理になれているが、わが国はまことに下手である。もっとも去年設立した「日本ネパール文化協会」(Japan-Nepal Society) は専務理事がプロモーターとなり、A Source Book on the Cultural Intercourse between Japan & Nepal が出版されるとときく。だがこの資金は The Asia Foundation から拠金されたものである。もし日本ヒマラヤ財団があれば、当然その一端をになわせてもらえたらう。本会でもマナスル登山があった。当時はこれに忙殺されていたろうが、この記念として物的に何が残されようとしていたのであらうか。

もっとも下手に金と与えられたりしなくとも、真のアドベンチャーというものは、財政をうることもその一つであるかも知れない。またそれを日本に求めずとも外国で得るような業績をこそあげるべきものであらう。

他山の石 YM

年末、大掃除をしていたらオリビックの頃の切抜きがでてきた。某紙の「聖火台」というコラムであるが、当時感ずるところがあったり切り返していたものがある。

もう一度読み返してみたが、やはりハッと思い当るところがあったので参考迄に書きとめておくことにした。山登りではその位のことには常識となっているかも知れないが、外国の山へ行く様な場合については果して如何だろうか。もっとも他山の石とすべきである。

ヨットは最終日を迎えたが、この競技の勝負のカギは気象の変化とか潮の流れをどうつかむかということ。そこで江の島ヨットハーバーの中で、一日から海上自衛隊の四人の隊員が交代で二十四時間風向と風速を観測し、このデータを毎日刷物にして選手たちへの参考に出している。

アメリカ、デンマーク、ニュージーランドなどいい成績をあげているところは、毎朝選手村から選手たちがハーバーにやってくる時必ずこの資料をもらいにくる。

出艇準備などで選手自身がそがしいときには、付添いの奥さんが代ってくださるそう。

ところがレース開始以来日本選手はだれも取りに来ない。たまりかねて気象幕僚の吉岡三佐が、不振の日本勢にせめて最終レースだけでもがんばってもらおうと、二十日夜大磯選手村を訪れ、日本選手を集めて、

はなぶんちゅう



一夜つきの象意をよったという。



中村清太郎氏画

随想

—大島さんを中心として—

日本の

アルピニズム

(V) 終

安川茂雄

ことしの一月下旬、私は槍平から下山すると家内と高山で待ち合せて芦峠を訪れてみた。雪に埋れた高山線経由で富山へであるが、この一、二年高山線にのるたびに「越中八尾」(ヤツオと読む)という駅名がひどく私には惹かれてならないのである。猪ノ谷から二つ三つ富山によった駅であるが、この地名は大島亮吉の少年時代とむすびついて私にはたいへん惹かれるのだ。

昨年の八月、私は自費出版のかたちで大島の著作集『登高者』を編集して、このとき巻末に年譜を作成したのであるが、どうしても著者の幼時の履歴が不明なものである。生前ごく親しかった豊辺国臣氏の『登高行』中の一文がもともと大島の履歴をつたえたものであるが、それによると、

「大島は明治三十二年九月四日東京芝に生る。江戸っ子なり。十二才の時大島に会ひ生死を危ぶまれしも母堂の手篤き看護にまもなく癒え二、三年を滋父の郷里富山果八尾町に送れり。」

とあるのだが、大島の文章には幼少年期の想い出の文章は一つものこされ

てなく、八尾についてふれたものも私はみえない。すくなくとも三才のときまで本籍は八尾にもあり、家庭は父善太郎をめぐってきわめて複雑だったとおもわれる。つまり二重戸籍だったとみられるふしがあるのである。

私は東京と八尾関係の戸籍を友人の協力でしらべたあげく、そのような結論をえた。つまり大島には、なんらか出生をめぐっての暗い秘密めいた苦悩があったと——いまこれ以上詳しくはさし控えたいが、単に曝露めいた興味のための詮索ではなく、私にとって大島亮吉を知ることは芥川龍之介や太宰治の秘密を知る以上に重要なのである。ブライバシーを侵害しようなどという気持以上に、大島亮吉の山を識るために彼自身を調べたいのだ。なんと八尾における幼少時の大島について探ろうといくど考えたか知れない。富山駅からの「八尾行」のバスをみるたびにもいくどか八尾訪問の誘惑にかられてならないのであるが、そのたびに私は堪えた。

いつの日か私は『わが愛する一登山家の短い生涯』といった大島亮吉伝を書く機会がやってきたときこそ、八尾行を決意したかったからである。

それにしても例えば『登高行五年』中における三田(幸夫)さんの記した「会と仲間」中の「八尾の烙印」の中の主人公O(大島と推定)がひどく私には気がかりでならないし、やはりなにか大島には人間としての根源的な苦悩があったと想像せずにはいられないのだ。

そこにこそ大島の下の町ッ子でありながら山に惹かれ、なおかつ田部重治の宗教的な山岳観照につよい感動をおぼえたのではないかと私は考える。

あれまでにヨーロッパ・アルピニズムの研究をしながら、さらに日本の修驗道研究に本邦のアルピニズムの源流

をさぐろうとした大島に私は深い畏敬の念にかられるのだ。

アルピニズムがスポーツであることには私はなんら異論はない。ソビエト的な体育科目であつてもよいであろう。だが、例えば板倉勝宣の書簡にあらわれた社会への不安、それに対する自己への懐疑など、大島と同様にアルピニズムは、スポーツというよりももっと次元の高い、「スポーツ的」ではあつてもスポーツとしてのみえない精神性をもった行為として受けとりたいおもしろいである。私の「ドグマ」といえばそれまでのことだが、私のいう「ベル・エポック」のアルピニズムとはそのような背景のもとに成立していたかみえる。

五回という吉沢さんとの約束なので今回でおわるが、ひどく龍頭蛇尾であり、羊頭狗肉のしだいには寛容たまわりたいのである。

やがて三月二十五日——大島さんの三十八回目の命日にあたる。ことしこそせめて花束でも駒込蓮葉町の真浄寺の墓前にひとり花でも捧げたいと私は考えている。

海外遠征報告 ☆

アンデス遠征隊

同志社大学

—1965—

隊長

(II) 江上 康

I タバコ(ピース 三〇〇〇〇本)の持ち込みに関して

新聞ではリスト外のタバコを密輸したと発表されていますが、外務省では密輸という言葉は使ってなく、要は無税通関の申請リスト中にな

いたために、非常に煩雑な仕事を大使館に持ち込んだと抗議しています。

準備段階においても外務省の担当セクションに何度もこの点どういう方法で持っていきたいのか、前芝副隊長が聞きにいったという訳です。その返事が過去の登山隊に準じて下さいとのことでしたので、いろいろ調べましたところ、他の装備や食糧と一緒にリストアップして申請した隊もあり、また手荷物で持参して処理した隊などいろいろあるのです。この点ネパール・ヒマラヤの場合と相当違います。

われわれは、タバコ、酒などは、他の装備、食糧とは別別して考えておいた方が、万が一、タバコのために他の装備や食糧の通関が遅くなつて、登山に決定的な支障をきたすことを避けることができるかと判断したのと、梱包が京都でなされていたために、東京でしか受取ることの出来ないタバコの輸送及びその時間、手間ははぶこうとした訳です。

それに専売公社総裁の「同志社大学遠征隊用タバコ」という証明書を持参していった訳です。

ペルー入国時に当然このタバコのことと聞かれました。右記の証明書が日本本文です。税関でわからないためです。それで大使館でそれをスペイン語に直して裏書きしてもらった訳です。

方だと判って頂けると存じます。

II ある在留邦人の荷物の件

新聞ではこれまたリスト外の荷物を密輸しようとしたとなつています。外務省はこの荷物が登山隊に属するの衣類だったので、ひどく税関の心証を害し、登山隊が山に向つたいまでも、未処理のまま残されているといつております。

ある在留邦人の方が、われわれの日本出発直前に日本へ一時帰って来られ飛行機でペルーへ行かれました。随分前から現地情報を知らせてもらつたり、いろいろな手配、準備などやつてもらつていましたので、飛行機で帰られる荷物をみて、われわれが船で持っていくまじょうと、せめてもの御礼の意味で品物を預かりました。これを隊員の手荷物として持っていっていった訳です。無税通関申請のリストにないのが当然のこととして、かえってリストに入れて持っていっていただかしくなりました。

われわれはタバコと一緒に税関に正直に見せたわけですが、隊員が分けて持てばよかったのですが、兎も角そのまま提出致しました。タバコと一緒にしたので、とも角タバコの証明書を大使館からもらつて来い、ということにだけでした。大使館では「タバコだけですか」といわれるので「一緒に」である在留邦人の方の預かりもので「一緒に」とあります」と説明したところ、「それは大使館で証明するわけにはいかなければ、隊自身の責任でやって下さい」ということになったのです。至極当然のことだと思ひます。それでタバコの通関の時「十人が半年もペルーにお邪魔するのだから、いろいろお土産に使うのだ」と説明したら、タバコと一緒に通してくれたのです。税関の心証を害して未処置のまま残されて※

この一年間わたくしの山のぼりは甚だ出来なかった。例によって用事のついでや誘われて出かけた山行が殆んどで、しかも頂上に立ったのはたった一度だけというのだから。

一月下旬インドに出かけた。フランス航空機は台湾の北部をななめにかすめて、雪白山なみを左手に展開させる。次高山などの辺であろうか、飽かず眺め入った。ニューデリーでサリン国防次官に招かれ、コリー中佐はじめエベレスト遠征隊の諸君と歓談したの

北の山・南の山

果無(はてなし)山
附・雲取越のこと
古沢 肇

本題の果無(はてなし)山も、その首をかしげたくなる山の一つだ。右の図会には「無終山」在紀伊州日高郡と出ていて、「はてなし」という奇妙な名前になにか曰くでもありそう

は楽しかった。

四月末新野地温泉での海外登山技術研究会のとき、吾妻山について行き、小富士は火口壁の取付きまでだったが、東吾妻はスキー組のあとから歩いて登った。これがこの年唯一の登頂。

六月はじめウエスタン祭の帰り、一人で高ボッチから鉢伏山に向ったが、時間切れで山荘の手前から引返し、旧塩尻峠に下りた。むかし上諏訪から浅間温泉まで歩いたときに越えてから五十三年振りである。

七月下旬立山に登ったときは、雨と霧で雄山からの山めぐりは駄目、翌日は一の越からタンボ沢を下って黒四ダムに出て、舟で人造

谷文晁の「日本名山図会」には全国九十座の山を登載されている。これを地方別に見ると、一等多いのは近畿地方で二十五座、つぎが奥州で十九、関東は十八で、中部地方は十一と意外に少ない。

江戸時代と現代ではやがて名山の基準がちがうのだろう。九十座の山の中には、現在の地図でどの山に相当するかわからないのや、なぜ「名山」に選ばれたのか首をかしげたくなるような山もある。

気があるが、古歌にも歌枕にも縁はなさそうである。五万の竜神には八千山もある長い頂後にゴツクで「果無山脈」と記入してあるが、標高一六二二メートルの山に「山脈」とはずいぶん大げさである。一体どんな山なのか、あれこれ好奇心にかられて、正月の旅はこの山に出かけた。

正月七日、十津川村、下湯川大ピンから上って、熊野川のほとりの萩へと下った。十津川からの上りには、降りたての雪が積って、北風がごうごうとうなり、凍えるほど寒かったが、熊野側へ出ると、温かい冬の日差しに急に南国を感じた。「はてなし」の名の通り、頂上は細長く、四キロほど稜線を歩いてから下りになる。

行く手に中辺地の山々の重なりを見、眼下に熊野川の大きく蛇行するのを見ながら、ゆっくり下って行く気分は悪くない。山登りというよりこれは

湖を一巡りした。むかしの旅を思い出して少し感傷的になった。立山貫光会社のトンネルやケーブルの計画を実地に見て、文句をつけるのが一行の仕事であった。

八月に入ると稚内に招かれた機会に利尻岳のぼりの手配を整えたのだが、台風のおかげで駄目になり、礼文島で海浜に茂る高山植物の残りの花を賞でる破目になった。帰るとすぐ上高地で信濃山岳学校がはじまり、校長に引出された。槍沢小舎から槍に登るのが夜半から下痢をおこしたため、ミル一杯の腹では何とも脚が上からず、坊主小屋の下手から引返し

たのは不甲斐ない次第。八月下旬河口湖畔の会合に出たとき、山梨峠越である。この山越の道が高野・熊野の裏街道として栄えたことがあるというから、果無山の名が広く知られた理由も、その辺にあるのかも知れない。

なお後述の小雲取からこの山をふり返ると、ちょうど本宮の背後に屏風を上げたように、特徴のある山容が目に入る。同じ十津川の玉置山が名山図会に入っているのは、その山容が熊野路を行く人の特に目をひいたためであろうか。ともあれ十津川は近年ひどく卑俗化したのが、周辺にはまだ面白いところがあるようだ。

▲附・雲取越のこと▼

名山図会には「雲鳥嶺」となっている。くわしくは小雲取、大雲取に分れる中辺地の古道である。昭和十六年刊住友山岳会編「近畿の山と谷」によると、そのころ(昭和十五年)すでに廃滅寸前と書いてあるので、もう完全に

果の世話でスバルラインなるものを小御岳神社まで往復し、その心ない自然破壊が胸をわるくさせられた。

九月下旬往復九日でジュネーヴに行ったとき、シャモニーを訪ねた。山は雲なのでケーブルでもあるまいと、トンネルをぬけクールマイヨールに出てアオスタまで下り、グラン・サンベルナル峠をトンネルでぬけ、フォルクラ峠を越えてシャモニーに帰った。その間四時間。

十月中旬夏油温泉から石淵ダムと尿前林道とまわって焼石岳を北と南から眺め、一の関から須川温泉に上り、秋田側の子安温泉に下り、鬼首峠から荒雄岳の麓をめぐり、世界野地を訪ねた。つまり栗駒山のまわりをめぐったのだが天気がわるくて頂上は見えなかった。

十一月中旬大間では紅葉会のことには、沢口山について行く予定が雨でお流れになって、甚だ不首尾な昭和四十年の山行にとどめをさされた。

消滅したものと思っていたが、果無山から廻って来て、完全に残っていることを知って喜んだ。惜しむらくは製紙会社の伐採が入って見晴らしがよくなったが、わずかに越前峠の附近に、暗い中世の旅の面影が残っていたこと、それから果無山でもそうだったが、この雲取越にも新宮山の会の小さい道標があと大へん助かったことを書き添えておきたい。

※いるなどという報告がどうしてなされたのかおかしなことです。

以上見てみますと、外務省が大学長宛に抗議したのは「ある在留邦人の預り物をもって来た」という点で、それを隊が隊員のお土産だと税関に説明したためというようになります。

隊員のものでないものを(本当はある在留邦人の預り物)隊員のものでない抗議した訳です。ペルーの税関でも問題になる品物なり数量なら、隊員のものだろうが預り物だろうが、通さないか税金をかけるでしょう。旅行者は他人から預ったものを持って行ったり持って来たりしてはならない、などという法律はどこにもありません。ないというより証明のしようがないからでしょう。当然その持って来た品物で税関は調べるわけですね。

ペルーという国は、酒、タバコ、麻薬、ビストロなどは持って入れませんが、殆んどのものが(まして衣類の少々など)税金さえ払えば持込めます。われわれの品物は問題なく通過しているのです。大使館のいうように未処置のまま残されてはいません。

預り物である事情は私から大使館へ説明もしてありますし、その在留邦人の方がわかつた税金を納めるのが嫌で、われわれに荷物を預けたものがないくらいは、その方の人となりも大使館では十分知っているのですから、判って頂いていると思っていまして、この程度のことなら隊宛に一口言ってお下さればいいことです。われわれには一口の話しもありませんで、た。外務省が改めて大学長宛に抗議する内容ではないと思う訳です。

来年もヒマラヤ、カラコルムは入り難いとなれば、ペルー・アンデスへ行かれる方も多いと思います。この一文が何かのお役に立てば幸いです。(完)

橋庄三行による頂上から北鎌尾根下降について説明する。

○小槍（登攀記録）（佐藤久一朗）登高行五号

大正十二年七月青木勝、波多野正信ら三名による小槍登攀記録、記録としては第三登だが、見事なスケッチをそえ、岩登りの対象としての小槍を初めて紹介する。

○小槍と中山彦一（平賀文男）登山とスキー一号

小槍の初登攀は大正十一年八月松本の寺島利助、土橋莊三、ガイド浅川博一であると述べ、その三日後筆者は中山彦一を案内に第二登を行ったと記す。

○小槍登攀（井上銑次）山想一号

小槍の登路について 高橋栄一郎山岳二七ノ一

大正十五年、昭和四年十数回の小槍登攀を行なった筆者による東西南東各面のルートの解説。

○小槍ルートの研究（高柳源一郎）やま二二二号

大正十五年夏の登攀記録。裸足で登る。

○小槍（穂澤、伊藤）甲南高校山岳部報告創刊号

昭和二年七月の登攀報告。伊藤は単独で登攀を記録。

○小槍西壁の登攀（京都府立医大旅行部）山岳三十一ノ二

昭和十一年七月の登攀記録。

年夏早大、一高バーティが登っている記録がある。

○元旦槍ヶ岳に登る（黒田初子）「山の素描」所載 山と溪谷社 昭和六年

黒田正夫とともに女性による冬の槍ヶ岳初登頂の紀行。

○氷雪の槍ヶ岳紀行（村井米子）「雪山のあけくれ」所載 昭和書房 昭和二十二年

昭和八年一月槍平小舎より厳冬の槍ヶ岳登頂の紀行。

○冬の槍ヶ岳高縦走（沢本辰雄）立教大学山岳部々報四号

昭和六年十二月より七年一月にかけ槍ヶ岳より奥穂まで縦走、前穂へは強風のため断念し潤沢を下る。

○冬の槍ヶ岳高縦走（加藤泰安）山と溪谷十二号

昭和七年一月中島政太郎を同行し立大隊と前後し槍ヶ岳から北穂、奥穂、西穂への厳冬期初縦走に成功した報告。

○雪の北鎌尾根試登（遠藤常忠）RC報告五号

昭和七年一月六高バーティによる天上沢北鎌尾根側より独標に達した報告。

○槍ヶ岳尾根（堀龍雄）関西学生山岳聯盟報告第五号

昭和七年十二月より八年一月にわたる小槍を根拠に北鎌尾根をねらい、八年一月二日大槍を越え一峰を経て独標に達し天上沢にビバーク。三日水又乗越から槍沢小舎に戻り厳冬の北鎌に初の足跡を残す。なお春期は昭和四年四月慶大バーティが肩の小舎から一峰まで往復している。

○積雪期における高所露営、槍ヶ岳（金山淳）登高行九号

昭和九年一月大喰岳にテント露営し北鎌尾根独標を往復する。

○千丈沢を繞る山々（法大山岳部）山岳三十五ノ二

昭和二年以降千丈沢に注目した同部の足跡をまとめたもの。昭和十四年十二月赤岳、硫黄岳の冬期初登頂。昭和十五年三月天上沢より北鎌尾根に取り付き大槍登頂に成功。また部報「山想五、六合併号」には戦中、戦後の行動を追記し、昭和十七年十二月北鎌平から大槍往復。昭和二十四年十二月北鎌尾根末端からの大槍登頂を報告する。

○昭和十四年度春季穂高生活（佐藤耕三）日大山岳部報告四号

昭和十五年三月佐藤耕三以下十八名により、岳川BC、天狗コル、奥穂、北穂を経て極地法登山により槍ヶ岳往復に成功する。

○厳冬期燕槍縦走記録（東大スキー山岳部）昭和十八年

昭和十七年十二月より十八年一月橋本隊長以下二十一名による厳冬の縦走報告。東鎌尾根より槍へ直登、槍東南登攀を記録。

○槍ヶ岳（硫黄岳、赤岳の尾根より）。槍ヶ岳（北鎌尾根）（松海明）「風雪のビバーク」所載 朋文堂 昭和三十五年

昭和十八年四月単独で湯俣より硫黄岳、赤岳を縦走、西鎌より槍登頂の紀行。及び昭和二十三年十二月北鎌尾根で風雪のため遭難の記録。

○厳冬期、硫黄岳、赤岳、槍登頂記録（諸岡久四郎）せふり五巻二二二号

昭和三十一年十二月より三十二年一月 福岡山の会十二名の隊により湯俣調整池をB Hとし、硫黄、赤岳を経て槍ヶ岳往復の記録。

○三十三年度冬山、春山報告 学習院大学山岳部報告山岳二二二号

昭和三十三年十二月北鎌平に露営千丈沢側ABD各峰及び北面より小槍の積雪期初登攀を行なう。三十四号三月北鎌尾根末端より

槍、奥穂、明神及び西穂への縦走を行なう。

○槍ヶ岳北鎌沢遭難 専修大学山岳部報群峰三三三

昭和三十四年十二月北鎌沢において雪崩のため六名の遭難死亡者を出した報告。

五、宮様登山に関するもの

○東久通宮殿下日本アルプスを御踏破あらせらる。山岳十一ノ一雑報

大正五年八月東久通宮殿下の槍ヶ岳登山についての朝日、報知新聞などの記事の転載したもの。

○RCC以前の槍ヶ岳紀行（藤本九三）ケルン三三（一九五九年）

右の登山に朝日記者として随行した筆者の思い出と報道の苦心を述べる。

○秩父宮殿下に侍して槍ヶ岳へ（木暮理太郎）「山の憶ひ出」下巻所載 龍星閣 昭和十四年

大正十一年七月秩父宮に侍し、燕岳、大天井岳、喜作新道、槍ヶ岳、上高地への縦走紀行。植有恒、早川種三らも同伴する。

○秩父宮殿下穂高連峰縦走 山岳三十二ノ一

昭和二年八月植有恒、早川種三、岡部長量らがご案内し、岳川天狗コル、ジャンダルム、奥穂、北穂、槍、小槍、双六、笠ヶ岳縦走についての東京朝日新聞記事の転載。

○Eight days in the Japanese Alps, Prince Chichibu, Alpine Journal No. 238 May 1929

昭和二年の穂高縦走をアルパイン・ジャーナルに寄稿したもの。宮様自ら筆をとり、ウエストン及び浦松佐太郎が翻訳に当たったという。

○近き御垣（秩父宮）東京日日新聞社 昭和二年

右の穂高縦走記が当時東京日日新聞に掲載され大騒ぎになったが、事実上認められ、東日でアルパイン・ジャーナルの記事とともにバイフレットにまとめたもの。松方三郎氏蔵。後、遺稿集「思い出の記」に収録。

○小槍（藤本九三）「雪・岩・アルプス」所載。梓書房 昭和五年

秩父宮一行の小槍登りの模様をくわしく述べる。

六、その他

○槍ヶ岳紀行（芥川龍之助）「梅・馬・鶯」所載 新潮社 大正十五年

大正六年徳本峠を越え槍ヶ岳を指した紀行。文士の書いたものとして有名。登頂はしていない。

○日本山岳全集六巻 朋文堂 昭和三十五年

ウエストンの「槍ヶ岳登山」鳥水「槍ヶ岳探検記」鶴殿正雄「穂高岳槍ヶ岳縦走記」大島亮吉「三月の槍ヶ岳」板倉勝吉「槍の北鎌尾記」佐藤久一朗「槍」加藤泰安「冬の槍ヶ岳高縦走」など貴重な文献を網羅し収録する。

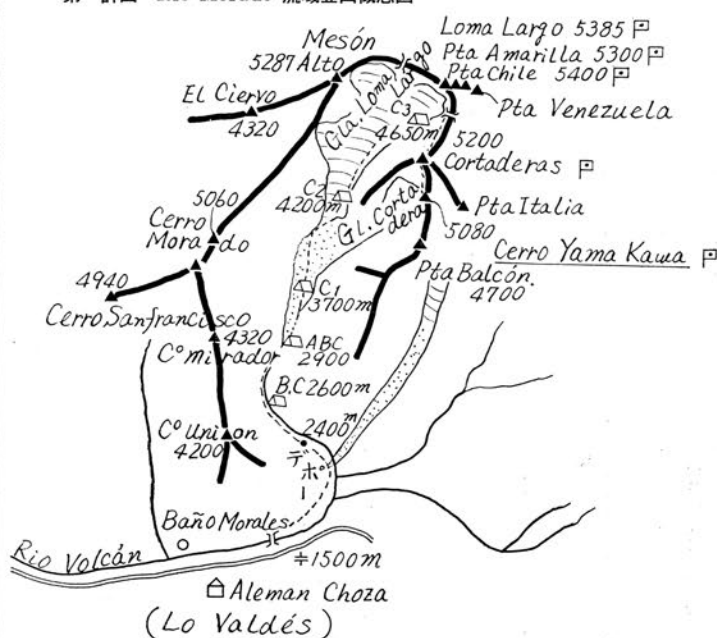
○測量苦心談（岡本松三郎）ハイカー九号

明治三十五年九月中島政師一行の槍ヶ岳測量登山についてふれる。

付記

ことしの山岳会の年次晩餐会の「この一本展」は槍ヶ岳の文献を並べることとしたので、至急目星しいものと書担当の深田久弥さんから拙宅に電話をいただいたのは、晩餐会二週間前のことであった。を記念して地元スイスでは色々のお祝をやったが、それに因んで、日本のマッターホルンである槍ヶ岳に関する「一本展」をやることにしたというお話しであった。「この一本展」はことしで四回目（あと三行は一八頁へ）

第一計画 Rio Morado 流域登山概念図



【中部チリ・アンデス ☆

☆☆☆ 登山報告 (1965)

隊長

久野英一郎

報告に先だち故山川勇一郎氏のご冥福を心からお祈り申し上げます。

チリという国

ここ数年間、日本からチリに入った登山隊はありませんでした。最近のチリの国状から報告いたします。人口は約八五〇万人、土地の面積は日本の約二倍ですから人口密度は約二十分の一になり

ます。これを大別すると原住民約二％、他は白人でスペイン系が主力、ドイツ、イタリー、フランス、アラブ等からの移住者が大多数で、東洋人は非常に少く、日本人は外交官在留邦人、商社マン、合せて約三百人位しか居りません。人口増加率は近年は二・四％位、首都サンチャゴの人口は約二〇〇万人、他は各都市に分散して、殆んどが中央部分に住んでいます。政体は共和制で、一九二五年に三権分立、国会は二院制で上院は四五名、地理的特色に分けられ九選挙区、任期は八年、下院は三万人に一人、又は一万人に一人、五千人に一人とされ、現任一四七名、任期は四年で上院の半数

は下院の改選時に同時改選されます。法律案は大統領教書又は上下議員の動議により発議されます。

予算は大統領のみ発議し得て、課税、行政、予算、募兵に関する法律案は下院、大赦、刑の減免に関する法案は上院と限定されているのは大変面白いと思います。大統領は法案の全部、或は一部に対して拒否権を持つそうです。行政は中央集権で全国を二五州に分け行政されています。人口一〇〇万以上の都市の市長は大統領の指名で任命されます。

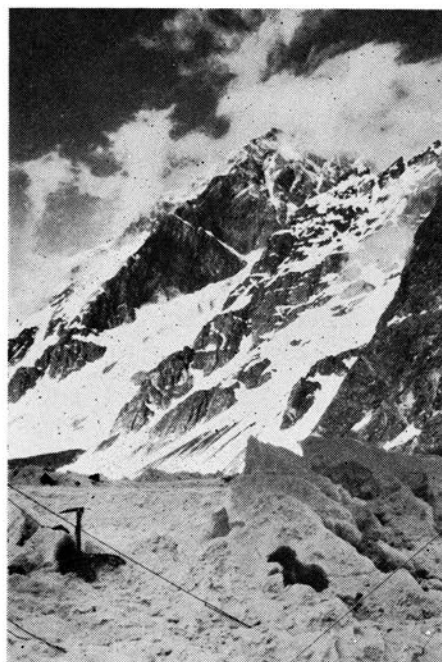
大統領の任期は六年で再選は許されません。大統領選挙は直接選挙制で、事故で大統領が変るときは閣僚中から法の定める順により、副大統領が一名出て大統領に代ります。副大統領は六〇日以内に大統領選挙を行う事を指定しなければなりません。

【政党】

保守党はカトリック教系、急進党は社会主義政党で中産階級に良くうけ、自由党は上流階級に多く反共であります。キリスト教民主主義はフレート大統領の現政府でインテリ層、学生層に人気があります。社会党は共産党と共同戦線を結んでいるそうです。共産党は一九四八年非法とされたが一九五八年再び合法化されたそうです。

【軍事情】

二〇才から四五才までは兵役の義務があり、現役一年の後予備役に編入されます。陸軍は常備約二、三、〇〇〇人、六個師団の他、チリ人御自慢の騎兵一個師団があります。海軍は義勇兵制で平時約二、〇〇〇人、一万吨級巡洋艦二、駆逐艦二、フリゲート艦六、潜水艦一、巡視艇二、沿海警備艦四、測量艦一、油運艦二、輸送艦五、上陸用舟艇四、となっており、軍港は五三軍管区に分けられます。空軍は八五〇〇人、四軍管区に分け、ジェット機



【CIから見た、セロ・ヤマカワ】

事ぶり、時間の正確さは吾々の方がしばしば赤面する位です。

【教育】

一般に教育に関する関心は非常に高く、義務教育の就学率は殆んど一〇〇％に近いようで、初等教育は義務制六年、中学六年、大学五年となっています。

【マスコミ】

新聞数は全国で約四五社、発行部数は全部で約一〇〇万部位でしょう。メルクリオ、ディアロイ、イルストラド、ナシオン等が有力紙ですが日本の一流紙に比べるとはるかに誤報が多く見られます。ラジオはラジオチレナ、ラジオバルマセータ、ラジオミネリ、タ等民間放送が盛です。テレビ局はチリ大学、カトリック大学の二か所に局を持っていますが未だ試験放送の域を脱していないように見えました。

尚、一九六二年奢侈禁示法が出て現在外国製品の大半は輸入禁止が非常に高額関税がかかれています。吾々の装備食糧もこれに引掛り一時は一万ドルの関税を要求されましたが、大※

日本山岳協会への加盟経過報告

東京支部

本会と全日本山岳連盟により構成されていた日本山岳協会は、去る昭和四〇年八月八日に開催された臨時役員総会において「日本山岳協会は各地方支部単位団体の積上げの上に組織されるべきである」との結論を得てその組織を全面的に変更することになりました。これは新聞、本会々報その他により既に周知のことです。

かかる組織変更に伴い当日本山岳協会東京支部は当然「各地方支部単位」である東京支部における単位への参加が望まれたのであります。これは日本山岳協会の理事会における決定でもあったわけ

です。そこで当東京支部では委員会を中心に新日本山岳協会への加盟ということにつき鋭意検討を重ね、また全日本山岳連盟の東京支部における単位であったところの東京都山岳連盟とも数回に亘って懇談した結果、今回東京都山岳連盟への加盟ということになりました。で、ここに報告いたします。

前述の検討及び会談に先立って東京支部というものを次のように考えたのであります。即ち東京支部は、東京、千葉、埼玉、神奈川各都県に在住するの会員をもって組織する本会の一部であるが、この会員のうちには個人会員と団体会員があるわけで、団体会員とは学校山岳部が大半であるが、職域団体と思われる山岳部であり、学校山岳部については他の地域の学校山岳部と共に本会内に「学生部」を組織して学校山岳部としての独自の活動をしているのであります。そこで、日本山岳協会の新組織へ加盟するに際しての東京支部というものは個人会員をもって形成する東京支部に限定し、学校山

岳部についてはその特殊性に鑑み、学生部の場において考慮すること（既に学生部総会が東京支部とは関係なく開かれた）とし、職域団体に関しては東京支部の方針が決定次第、新協会への加盟方法を説明し、すすめることにしたのであります。これは日本山岳協会の新組織が下部団体の積上げであり、従来の二本の柱（本会と全岳連）を解消するためのものであります。から、東京支部についてもその下部に団体を有する組織でない方が新協会の構想に沿っているものと判断したからであります。

全日本山岳連盟の東京支部における下部組織であった東京都山岳連盟（以下都岳連）というは、東京都体育協会の加盟団体として、傘下に東京都に存在する一七五の山岳団体をもって組織する連盟体であります。

この都岳連の呼び掛けによって、去る昭和四〇年十一月十一日に初会合を開催し、都合三回にわたって正式会談をもちました。この会合記録全文を次に掲載いたします。

日本山岳協会の組織改正に伴う東京支部における下部組織に関する都岳連との会合記録

第一回 昭和四〇年十一月十一日午後七時より於日本山岳協会。出席者石田稔郎、古尾谷芳太郎、松山直人、篠崎守男、本多昭一以上都岳連、石原憲治、沼倉寛二郎、関口周也以上東京支部、高橋定昌、大塚博美、松田雄一以上日本山岳協会。

最初に都岳連側より東京都に対して「東京支部は都岳連に加盟されたい」との要望が為され、これに対し東京支

部側は「新しい日本山岳協会の組織については大いに賛成であり、東京支部はこの趣旨に沿うよう日本山岳協会へ加盟する。また東京支部傘下の学校山岳部を含む各団体にに対し、新協会の趣旨につき充分説明し、新協会に加盟するよう努力したい旨を述べた。このためには都岳連との協力を惜しまないが、具体的にどうするかということは今後充分協議し、検討した上で決めたい」と言明、あとは雑談形式でオブザーバーとして出席の協会役員を交えて、新協会について若手の質疑応答がなされ、とにかく今後はお互いに協力して新協会の趣旨に沿うものにしたという意見の一致をみ、第二回目の会合を約して散会。

第二回 昭和四〇年十一月二十六日午後七時より於日本山岳協会。出席者石田稔郎、本多昭一、篠崎守男、松山直人、古尾谷芳太郎以上都岳連、広谷光一郎、関口周也以上東京支部、加藤泰安、高橋定昌、辰沼吉吉、松田雄一以上日本山岳協会。東京支部側より「日本山岳協会の改組に伴う新規約およびその趣旨を検討した結果、その趣旨に沿うためには、東京都においては東京都山岳協会というものを新たに設立し、都岳連および東京支部傘下の諸団体にに対し加盟を呼びかけ、東京支部自体一単位としてこれに加盟し、現在都岳連または東京支部の何れにも加盟していない団体にに対しては積極的に加盟するよう呼びかけるようにしたらどうか」との提案があった。これに対して都岳連側は「東京支部の意見は判るが現在の組織を改変することはおいそれと出来ることではないし、協会の要請の趣旨に従って、東京都の新しい組織はどう結末すべきか、話し合いをこのまま続行してもいいが、それでは協会

※ 使館関係者各位の御尽力によりテレビラレーミッショントで持込む事が出来ましたが、出国時チリ国内に於て消費した品物に対しては重量税と物品税の二重加税された関税を支払う事になっていました。その金額については今だに決定されませんが相当高額の関税が来るものと思っています。

われらの行動

さて、十月二十日モラド河流域調査にチリ岳連ビオン君と(Dián González)友田、中戸両隊員と共に入りました。ロバレイエス(Lo Valdes)の直ぐ先にあるエル・モロ(EI Morro)二九〇〇米峰に登り、第一計画のロマルゴ、コルタデラス、メンソン・アルト、セロ・モラドなどの山々の登路を調査しました。

十月三十日やと後発の隊員が川汽和川丸でサンアントニオ(San Antionio)に入港、直ちに登山体制をととのえ、予定の行動に入ったわけですが、以下登山の経過について報告いたします。

第一計画モラド河流域登山

十一月三日(快晴)
五・〇〇トラックでサンチャゴを出発、ロ・パルレイエスに向う。荷物をムーラに積更え、モラド河を遡行する。標高二四五〇米附近で日没近くなり、雪も次第に深くなったのでデポ地と決定、馬を返す。

十一月四日(快晴)
全員でABC建設の為荷上げをする。二九〇〇米附近の台地に荷物を置きABCと定め全員デポ地に帰る。

十一月五日(快晴)
井関、松本、中、篠、中戸、マリオ、ルセロはABCを経てC1に向い、荷物をデポしてABCに帰る。友田は映画撮影のために同行し、ABCから

引返し、BCに泊る。久野、浅川はBCを建設、荷物をBCに上げる。

十一月六日(小雪・薄雲)

井関、松本、中戸、中、篠、マリオ、ルセロはC1を建設して泊る。松本、中、サボット、ABCに帰る。久野、浅川、友田はデポの荷物をBCへABCに荷上げ、BCに泊る。

十一月七日(晴)

井関、中戸、篠、マリオ、ルセロはC2へのルート偵察と同時に若干の荷上げをする。マリオ、中戸はC2泊り。他はC1に帰る。友田はABCで松本と合流、中と共にC1に入る。久野、浅川はABC泊り。

十一月八日(快晴)

中戸、マリオはC3を建設し泊る。井関、松本、ルセロ、中、篠はC2に入る。久野、浅川、友田はC1泊り。

十一月九日(晴)

中戸、マリオはロマルゴ四峰の中ロマルゴ主峰、五三八五米、プンタアマリージャ五三〇〇米、プンタチレ五四〇〇米の登頂に成功、松本、中ルセロはコルタデラス、五二二〇米の登頂に成功、井関、篠はC3からC2に引返す。久野、友田はC2に入り、友田はC2泊り、久野はC1に引返す。浅川はABCからC2デポ地へ荷上げの後C1に帰る。C1にて夕食時山川画伯の姿が見えず、久野、浅川、深更まで搜索するも見当らず、事故発生と断定する。

十一月十日(晴・吹雪)
C3から中戸、マリオは未登峰(五〇八〇米)の登頂に成功する。松本、中、ルセロはプンタアマリージャ、ロマルゴの再登をする。篠は遭難連絡にC3に入る。全員C1に集結、登山活動を一切中止し、捜索活動に全力をつくす。全員全てを終り、十一月十五日下山、サンチャゴに帰る。

(次回完結)

(前頁三段より)

が要望している昭和四一年一月十五日までの申込期限はおろか、二月五日の第一回評議員会にも到底まにあわない。また「東京都山岳連盟は、全日本山岳連盟の加盟団体として存続するものではなく、新たに日本山岳協会に加盟すべく準備を進めているし、それに伴う規約などの改正も行なうよう考慮している段階である。規約を改正して新協会に加盟すれば、その下部団体として活動することになるので、実質的には都岳連は新しい組織になったと同様である。なお、そのための都岳連の評議員会は昭和四一年一月下旬には開催される見通しである」と説明した。これに対して、加藤泰安日本山岳協会専務理事は「そういうことであるならば、東京支部は名称にこだわることなく、その線で話し合いを進めていってらうか」と提案した。都岳連側はさらに「日本山岳協会の方々は新協会の役員として今後とも活動していただかなければならぬので、そのためにぜひ都岳連の理事に多数の方がなっていたらいい。山岳界のために何とぞ力をお貸し願いたい」と要望。加藤泰安氏より「今後の話し合いを進めるために、双方二名宛の委員を出し、小委員会構成で煮つめたらどうか」との提案がなされ、双方了承した。

の執行部(理事会)に東京支部より相当数出て、協力されたい」と要望した。「現都岳連は、新しい日本山岳協会の趣旨に沿い加盟するために、実際どのような改組を現在考えているか、例えば現規約はどのような点において改正されるか」との東京支部側の質問に対して、都岳連は「先づ現規約中第五条を『本連盟は、東京都体育協会及び日本山岳協会に加盟する。但し発展的解消を決定する昭和四一年度全日本山岳連盟評議員会までは全日本山岳連盟にも加盟する』と改正し、来年一月に開催するよう準備中の東京都山岳連盟評議員会において決議されるよう努力している」と言明。また「現都岳連規約によると、評議員はクラブ一名と定めているが、人数を決めるようにしたかどうか。この点について都岳連は現在どのように考えているか。また分担金もクラブ員数に比例して金額を決めたらどうか」との東京支部側の質問に対して、都岳連側は「これについては現在研究すべき段階にきているので研究しつつある」と答えた。また東京支部側は「現在、都岳連には高体連を含め、地域連盟体がいづつか加盟しているが、これは新しい日本山岳協会の趣旨からいっておかしい」と発言。これに対して都岳連側は「これらは将来、単独加盟させるよう指導していくことになる」と答弁した。東京支部側より「現在都岳連にはアマチュア規定に違反するような団体は加盟していないか、アマチュア規定についてはどのような審査機関があるか」との質問に対して都岳連側は「審査機関は理事会である。加盟申請が出されたときに審査している」と答弁。ここで加藤泰安日本山岳協会専務理事は「東京支部側は都岳連に対してこうしたらどうかとか色々要望などを行っているが、現都岳連がそのようにならないければ加盟しないのか。日本山岳協会では松方構想により山岳各支部は各都府県別の山岳連盟または山岳協会に加盟することが理事会ですべてに決まっている。現在、東京都には都岳連という立派な組織があるのであるから、東京支部は、ただそれに加盟すればよいのであって現都岳連に加盟しよと意見言うのは行き過ぎである」と発言。これに対して、東京支部側は「現都岳連は、新しい日本山岳協会の趣旨に沿うよう改組するとの前提があり、東京支部はこれに加盟しようとしているので、どのようにしたら現都岳連が新しい日本山岳協会の趣旨に最も沿うようになるか充分検討した上で意見を述べているわけである。従って、東京支部は現都岳連に加盟すればよいのであると言ったのであれば、都岳連とわざわざ会合を開いて意見の交換をする必要はないのである」と発言して会談は打ち切られた。

以上は三回に亘って開かれた都岳連との正式会合の記録で、これから容易にお判りになると思いますが、東京支部は当初日本山岳協会の新構想に基づくものとして、東京都に都岳連と協同した新組織設立を提案したのであります。が、都岳連側の意向を汲んで撤回し、大乗の見地になつて都岳連へ加盟ということになったのであります。都岳連に対する当方の見解を文書にまとめて、去る一月二〇日付で東京支部長名で都岳連会長宛に提出、これに対して都岳連石田稔理事長より三月一日付で返事を受取りました。両文書を次に掲載いたします。

東京都山岳連盟

会長 平井義 殿

社団法人 日本山岳協会

東京支部

支部長 石原憲治

日本山岳協会の組織改正に伴う東京都における単位組織について、貴東京都山岳連盟と当日日本山岳協会東京支部は過去三回にわたり会談を重ねて参りました。この会談の当初に当日日本山岳協会東京支部は東京都においては既存の団体にとらわれずに全く新たに東京都山岳協会というものを設立するのが協会の新趣旨に最も沿うものと考え、これを提案したのであります。

しかしながら、これは時間的に間に合わないとの理由で貴東京都山岳連盟は次の提案を為したのであります。即ち現東京都山岳連盟の組織を日本山岳協会の新しい趣旨に沿うよう改正してこれに日本山岳協会東京支部が加盟してはどうかという提案でありました。

そこで、当日日本山岳協会東京支部では如何にしたら現東京都山岳連盟は新日本山岳協会の趣旨に沿う、その下部組織になり得るかを慎重且つ詳細に検討したのであります。この点について過去三回の会談中に折りに触れて述べたところでありましたが、ここに改めて一括して提案し、貴東京都山岳連盟におかれまして、これを充分考慮され善処されるよう望むものであります。

記

これは、当日日本山岳協会東京支部が新日本山岳協会の趣旨に沿って改組する前日本山岳協会の下部組織に加盟する前提条件として要望するものであると解釈して頂きたいのであります。

一、現東京都山岳連盟規約中改正すべき点。

a、第五条を「本連盟は、東京都体育協会および日本山岳協会に加盟する」と改正。

b、第九条中「評議員加盟団体各一名」とあるを「評議員は別表に従う数」とし、
c、第三条第一項を「本連盟の分担金は別表に従う」として次表を規約の最後に加える。

別表

加盟団体の評議員数および分担金の額

会 員 数	評議員数	分担金の額
三人未満	一人	二,000円
三人以上五人未満	二人	三,000円
五人	三人	四,000円
十人	五人	五,000円
二十人	八人	八,000円
五十人	十人	一〇,000円
五十人以上	十二人	一五,000円
以上	十五人	二〇,000円

二、現都岳連の加盟団体中には「連盟体」として加盟しているものがあるが、これは個々の団体につき加盟させる。

三、現在、都岳連内に設けられている種々の専門委員会は全日本山岳連盟の加盟団体時設けられたものであるから、改組に伴って再考する。

(都岳連石田稔理事長からの返書)

昭和四一年三月一日

社団法人日本山岳協会

東京支部長 石原憲治殿

東京都山岳連盟

理事長 石田 稔 郎

要望書に対する回答について
昭和四一年一月二〇日付による都岳連会長あての要望について、回答が遅れて御迷惑をおかけしましたが、いぜんとして、機関に計って回答をさせていただきます。時間が目下のところと来ませんので、私信という形で下記のように回答いたします。

記

一、規約改正について

※



いわなだめ・1962

会員通信

ケニス・メイソンの手紙

望月 達夫

いまはサセックスで余生を送る曾てのHJの名編集者メイソン教授から、旧撰次のような手紙に接した。私のクリスマス・カードに対する返事だが、メ翁がかねて郵便切手のコレクターであることを知っていた私は、毎冬カードのなかに、日本の新しい切手を封入した。

Dear Mochizuki,

How very kind of you to send me all those Japanese stamps with your Christmas good wishes. They are, I think, some of the most attractive ones, and certainly the best-printed stamps of any country today. They also have brought up to date my Japanese collection, which I have always kept up throughout my life. I am now 78 years old, and not so active as I was in my

Himalayan days, but still manage to keep up with the mountaineering news of Himalayan ventures. Japan is taking her full share in these, particularly in Nepal, but I understand permission to go there is becoming more restricted, and when obtained much more expensive. Conditions are very different from the happy days when I first went to the Himalaya 55 years ago and could climb about the mountains without permits and passports and everyone was friendly and cheerful.

Wishing you and your friends all happiness in 1966.

(一九六六・一・二四)

シルクロード踏査隊

第一信

深田 久弥

お見送り有難う。ハノーヴァーで車の整備で五日滞在(土・日があつたため)その間にハンブルグへ行ってきました。毎日アウトバーンを疾走。ミュンヘンからウィーンの途中で初めて雪の山をみました。夕方着、宿探し、早朝出発で町見物の暇はないけれど、今夜はウィーン国立劇場でオペラの立見をしました。会の皆様によろしく。(ウィーンにて二月四日付、松田宛)

地方会員の声

(一六七) 金山 淳二

(前略)山岳会はこの一年、記念会のためあつたでしよう、ヒマラヤなどが猛烈に忙しくなつたこと、会報が画期的編集により、会員相互を結んだことなどで、目覚ましく動き出しましたが、それだけに関係者の御苦勞は大変なことと御同情申し上げます。切て会報につき一言言わせて頂くなら、一月号の編集後記によれば、二月

は十二ページ、三月は八ページとか逆コースも甚だしい。いくら記念会に予算をつかたからとて、それを会報にしわよせさせるのは、東京在住会員の独善的認識不足ではないでしょうか。地方会員は会報によつてのみ、会員を自認している面が多いのです。二月号も三月号もまだみていませんがそれ手にした時、何と寂しいことか。四月号からは理事会で断呼主張願います。勝手な気持になり申し訳ありません。これも会を思う地方会員の一つの声と御考え下さい。(後略)

(三月十日付)

アコンカゲア南壁を終えて

東海支部 原 真

三十五日間の苦闘の末、やっとアコンカゲア南壁を落しました。苦しい荷あげのあいだあつて上部水壁にC3を作り、そこから一回のビバークで頂上にぬけました。登頂者は四人ですが、これは全隊員(八人)の汗の結晶だと考えております。

アコンカゲアはなかなか国際的で十一ヶ国の人間に会いました。ボナッテイーの友人マウリに会えたのは感激しました。加藤さんの事を知っていました。

この先我々の行動は三月一杯をパタゴニアの旅にあてます。帰国は五月になります。

南米の山は好天に恵まれることと高度の低い点で、ヒマラヤの巨峰よりはるかに大分やさしいのではないかと感じを受けています。

アコンカゲア南壁登頂の評価について、隊員の中でも考えが二つに分かれています。

これを無理に世界的業績にデッチあげようとする考えと、大した登山でもなかったと考えることです。

私は何よりこの登山は退屈だったと

考えます。このような壁での極地法は困難ではあつても人間的には何か喪失しているとしか思えない様な気がします。

岩登りはラッシュンタックティックでやつてこそそこに妙味があるのだと認識をあらたにしました。この先パタゴニアの旅でアコンカゲアの塵を清めたい気持です。(三月三日付 加藤泰安宛)

長野県

ニュー・ジラランド

志川 輝夫

拝啓 早春の候皆々様方にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。さて私たち長野県山岳連盟ニュー・ジラランド登山隊は最高峰クックの登頂をはじめ一〇座の登頂、各水河の探索など当初の計画を無事終ることができました。またニュー・ジラランドの人たちにも有意義な交歓会や生活を送り協力ながら両国の親善を果し三月四日帰国いたしました。

私たち隊員一同が一致協力し全力を尽すことができたのもひとえに皆様方のご支援ご理解の賜ものと深く感謝しております。

とりあえず書面をもって帰国のご報告ならびに感謝の意を伝えさせていただきます。

昭和四十一年三月

大阪府

チリ・アンデス

友田 彦士

昨年より全日本山岳連盟チリ・アンデス登山隊員として遠く南半球の地を訪れて居りましたが、二月十五日の無事元氣な姿で帰国致しました。留守中は公私共になにかと御世話に相成り、早速御挨拶に参上致すべき処、何かと雑務に追われ取りあえず書面を以て御挨拶にかえさせていただきます。 敬具 昭和四十一年三月十五日

※a、第五条については、昭和四十一年一月二七日都岳連臨時評議員会において次の様に改正致しました。

「本連盟は、東京都体育協会及び都道府県体育協会加盟山岳団体を直接加盟させることによりて組織する全国団体に加盟する。」

b、第九条の評議員数については、都岳連としても別表スライド方式によることを妥協と考え、目下検討中です。

c、第三三条第一項については、従つてbと同じです。

二、地域岳連として加盟しているものについては、考え方は同様であり、昭和四一年度活動基本方針で明確に打ち出す予定です。

三、昭和四一年四月に都岳連の役員が改選されますので、どういった専門委員会を設けるかは新理事会によって検討されることとなります。従つて現段階ではお答えできません。

以上

東京支部では、昭和四十一年二月二日に東京支部委員、評議員会を開催し、都岳連との話し合いの経過全般について報告し、引き続き昭和四十一年二月九日に本会ルームにおいて臨時支部総会を開催して、東京支部長より都岳連理事長宛に送付した要望書の三項目の内容を議題として、討議した結果、承認可決いたしました。(総会議事録は別項掲載)

前記のような段階を経て、去る昭和四十一年二月二四日付で加盟申込書を都岳連に提出、直ちに承認されました。以上で東京支部は都岳連へ加盟し、正式に日本山岳協会へ加盟したわけであり、日本山岳協会に於ける活動の一步を踏み出したのでありますが、一方(あと8行は19頁4段右端へ)



I.Y.

海外情報

Lasistan (トルコ) 踏査行

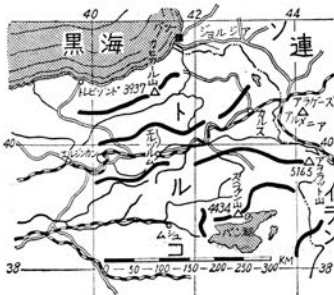
— 独塊隊・一九六五年 —

トルコ、ソ連の国境の南西にあるラジスタンは、コルヒス (Kolchis, 黒海東岸) の降雨地帯と、内陸アナトール (小アジア) の乾燥高原の間にあって、顕著な気候分界線 (Klimaschelde) を形成している (付図参照)。

Aygir 峠から北東に 50 km 以上延びている主脈の最高峰は大カヒカール山 (Grand Kaçkar, 3837 m) である。Hans Thoma に率いられた独塊合同ラジスタン踏査隊は、異常な好天に恵まれたこともあって、大部分無名の

峰頂、3000 m 以上のものを 21 座登頂した。初登頂もあり、新ルートによる登頂もあった。

一行は登山家二人、氷河学者二人よりなる小隊であるが、以前 R. Rickmers, Krenk, Leutelt, Strahl-Saur, Brecht Bergen 等といった先駆者が入った



以来 30 年振りに、それらの人達の残した登山的、科学的な落穂拾いにやって来た登山隊である。

この辺はトルコの登山団体が旺んに活動して来た地域であるが、インドのガルワールと同じように外部の者には軍事的な理由から入域を厳禁してきたところでもあった。

サウス・ジョージア島

一九六四・一九六五年にかけて、英国戦隊が遠征し、一九二一・二二年にシヤックルトンが初めて踏破したルートを、新たに横断、その際 Alandree 山脈で登山をした。堅く結氷した Royal Bay の周辺では、地図作成、突込んだ地質調査と生物学上の研究を行った。四カ月の旅、隊長は海軍少佐 Malcolm Burley。

南極の最低温度

Graham Land 半島の Sobral 基地 Belgica 海と Weddel Sea の間のアルゼンチン陸軍保護地、一九六五年六月末、80.7°C を記録した。一九五七年の冬、極点 (二八〇〇E) の南極点アメリカ基地では 75°C の南極点とクイン・メアリーの間にあるソ連基地では、一九五八年の冬、80°C と 81.2°C を観測。尚、奥地の高台地域における冬の平均温度は 50°C 以下という事である。

コーカサス

ユーゴスラビア隊 (1965.7/15 - 8/15) 隊員 Pavle Segulac (隊長), Golub, Kukovec, Jatic,

Smerke, Kambic, Potocnik, Rupar, Setinjin 及びその妻 Barbara Lippovsek。

【活動】ベジンギ BC より、ミセス・タウ (4427 m)、ディクタウ (5198 m)、コシュタン・タウ (5151 m) に登る。次に二隊となり、シニカラ・ジャンギ・タウ東峰 (5651 m) 縦走、Merzbacher Rippe を下る。シニカラの Tomaschek Pfeiler (VI) を四人隊が登る。ベジンギ壁上の縦走は悪天候で中止する。

— Alpinismus, Jan. 1966 —

ヒンズー・クシユ情報

「山岳」第六十年 (一九六五年) に『ヒンズー・クシユ覚え書』を発表したが、その後入手した資料により訂正増補をしておく。

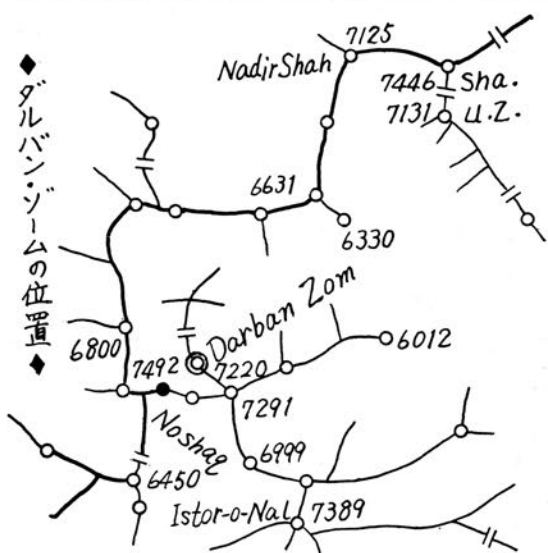
ダルバン峰初登頂 (1965)

これは結局、オーストリアとイタリアの合同登攀ということになってしまった。

(Öst. 隊) Markus Schmuck, Christian Schmuck (息子), Hans Egger。

(Italy 隊) Dieter Drescher, Uli Kössler, Helmut Larcher (南チロル山岳会所属の有名な登山家達) イタリアのメナノ隊は Tirth Mir の北側山群を探りに来たのであるが、土地の人の話によると、同北峰 (7059 m) は既に他の遠征隊が試みていたという。

奥伊両隊とも損失は八人。Darban 氷河の BC (4600 m)、CI (5270 m) C2 (6040 m) ノシヤクの北面は雪崩の危険多し。(細かいことはここでは略す) Gumbaz-e-Saled (6797 m) の一四〇〇 m の壁の下は気持が悪い。正午 C2 着 C3 (6400 m)。九月二日午後四時、MS と UK の二人が最後



◆ ダルバン・ゾームの位置 ◆

の岩上に立つ。HL は調子が悪く二三〇 m 下から戻った。

HE と DD と CH S の三人は、CI から同じ日 (9/12) に Me (6260 m) と Oe (6240 m) に「バイゼン」マケルなしで登る。

九月十三日全員 BC 集合、奥隊は往復 35 日で遠征を済ませた。

(MS は一九六三年にも二峰の初登頂を往復 33 日でやっている。高速度遠征が好きらしい)。

— Bergsteiger, Dez. 1965 —

カラ・パンサ峰その他

山崎安治氏から「Der tschechoslowakische Sport, 4, 1965」という雑誌が送られて来た。見てとチエコ隊のワカイン入りのことが書いてあった。それは考えてみると、一九六四年のことらしい。プラハを六月一九日に出発、そこへ九月二〇日に戻った。

これはチエコとして、はアジアへの最初の遠征という。そうだったかな。この年は七隊が HK に入ったが、最も東 (ワカン) の Ismurch (平原) へ行ったのはこの隊であった。

隊員は妙な飾りをつけてしまう。と次のようになる。

Vladimir Sedivy (隊長), Radovan Kucher, Rudolf Antonick, Ian Cervina, Ivan Gally, M. Jaskovsky, Ivan Uhanovic, Josef Poskaly, Milos Matras, Jaromir Wolf (医), Dr. Milan Daniel (動物), Vilem Hechel (写真), Bedrich Roger (映画) 彼らの初登頂したのは五〇〇〇 m 以上が 14 峰、そのうち六〇〇〇 m 以上が六峰あり。全部の高度はわからないが、登頂命名したのは「Pyramide Academic, Spurtakade-Berg, Koh-e-Heyad, Koh-e-James, Koh-e-Kala Pyanda (Qara Pansa, 6328 m)。

Koh-e-Meena (Farsi 語で「有情」6025 m) は八月九日に H, I, U, I, G, R, A, V, S とブガン人 Ekran が登った。この他に P と K の登った Koh-i-Uparasia (6210 m, 意味は「ロビンソン・クルソー」) Hoher als der Vogel fliegt) なども Aryam (5980 m) という山もある。(以上・吉沢)



中部ネパール 踏査隊帰国

謹啓 日毎に春めいてくるこのごろ皆様にはお変わりございませんでしょうか。お伺い申し上げます。

さて、泊山岳会から派遣されておりました中部ネパール踏査隊は6ヶ月にわたるネパール・ヒマラヤの踏査を成功裡に終えて、二月二日と三月六日にそれぞれ全員無事に帰国いたしました。ここに謹んで報告申し上げます。皆様から賜りました格別なご後援に対し、厚くお礼を申し上げます。

『会報の魅力』

島田 異

この会報が二百号に達したとき、回想的な一文を草したのが、すでに七年半も前のことになる。こんどは二百五十号という新しい一区切り、創刊いらい三十六年綿々とつづいたのを何よりの喜びとしたい。

いろいろの会が会報的な印刷物を届けてくれるが、長い期間、一号もおろそかにせず、大切に保存する気になるものは、そう

ちょうど印巴交戦の最中にボンベイに入港しましたが、九月一日、カトマンズへ安着しました。

そして十月一日からボカラを起点に、主目標であったティリツオ・ピーク(7138m)の偵察に向いました。ネパール当局の好意的な取計いと地元タカリ族の絶大な援助をうけて、約二〇日ティリツオ湖に定着し、これまでよく知られていなかったティリツオ周辺の調査を十二分に行なうことができました。なおその上に、当局の特別許可を得て、アンナプルナ山群一周をなし、十一月一日に四五日間におわたる第一回目の山旅を終えました。

第二回目の調査は世界の最高峰エベレスト山群に向けました。帰路をインド国境のビラトナガルにとり、五〇余日間の踏査でしたが、ほとんど連日快晴という好天にめぐまれ、印象的な山旅でした。なんなく、エベレストの西側、ゴジュンバ、氷河のゴキウからの大パノラマ、アルン河畔のトゥムリントールで、朝陽に輝くマカールを眺めて迎えた元日は忘れることがで

きません。

ネパール出国もあといく日と数えるようになった一月一日から、最後の調査旅行を雪のゴサインクンドに行ないました。積雪のため、思うように行程がはかどりませんでした。しかしこれら三つの山旅で、大ヒマラヤから亜熱帯のテライまで、西はダウラギリ峰から東のカンチエンジュンガ峰まで、ネパール・ヒマラヤの巨峰をあますところなく望むことができました。

いま、これらの踏査で得た多くの資料の整理にかかっております。逐次、新聞や雑誌などで発表していくことになっておりますが、隊としてのレポートを年内に刊行する予定であります。本踏査隊の準備以来、皆様から多大のご協力、ご援助をいただきましたことを、ここに改めてお礼申し上げます。本来ならば、拝眉の上、ご挨拶申し上げるべきところでありますが、書中にての失礼をお許しいただきますようお願い申し上げます。今後ともかわらぬご支援のほどをお願い申し上げます。

敬具

一九六六年三月七日

泊山岳会

代表 山本哲朗

中部ネパール踏査隊

隊長 葉師義美

同 伊藤信隆

同 金山清一

アコンカグワ南壁!!

南壁は、事故なく成功しました。悪いとは聞き及んでいましたが、流石に手強い奴でした。四十日に亘る骨身を削られるような苦斗で、体重が十キロも減ってしまいました。アンデスの氷は堅いと聞いていましたが、アイスハークンは、日本から持参した打込み式は通用せず、トニー・ヒーベラーというオーストリー製のネジ込み式のアイスハークンが有効でした。登攀の技術的部分は、滝谷や北岳バットレスなど、日本の冬山で鍛えたわれわれの腕で充分こなせると思いましたが、唯高いところへいって悪場が出ると、非常に苦しい登攀を強いられました。

ザイルは一五〇〇m位フィックスしましたが、これを掴んであえぎあえぎの荷上げは、全く苦しい日々の連続でした。

今、メンドサ市へ下って来ており、日数が少ないですが、バタゴニアを七隊に分けて歩いてから、五月初旬帰国します。望月さんによろしくお伝え下さい。アディオス、

六六・三・一二

吉沢宛

橋村一豊

因みに最近の新聞情報によると、この東海支部隊の一部の隊員が、バタゴニアのオリビア峰(二八〇〇m)に登ったということであるが、七隊に分れ

て活動とあるから、相当広範囲に亘る成果が期待されてよからう。

第6回 東京支部 登山研修会のお知らせ

期日・5月21・23日

(20日夜発・24日朝着)

場所・北アルプス穂高岳沢

会費・五五〇〇円

定員・三〇名

例年行なっている初心者から中級者を対象とした講習会を、今年は岳沢で行ないますが、もともとこれは「技術講習会」と名付ける程の技術取得本位のものでなく、もっと登山全体の包括的な知識を規則にしばられない自由な形で学んでもらおうというねらいなので、今年からは「研修会」と名を変えた次第です。

詳細・申込手続については本会ルームにお問い合わせ下さい。

追って、「二四八号」『東京支部スキー講習会報告』に講習会の行われた場所が書いてなかったとご注意がありました。軽卒の段深くお詫びします。場所は「信州山田温泉」でした。

会報二四九号訂正

六頁の新人会員氏名の中六〇五〇番白石勝教とあるは白石勝教氏の誤りにつき訂正。
尚、故森本次男氏の享年は六十才です。

第七回海外登山懇談会

〇二月七日(月) PM 7.00 JAC ルーム

〇テーマ・ニュージランド登山について

〇出席者 松田柳子、富田美知子、秋田きよ子、川井通子、山口節子、広谷精啓、渡辺文明、田中米穂、橋本清、大塚博美

〇ゲスト 明治大学冬山会合 ニュージランド登山隊長 橋本清

〇概要 昨年に引つづき、NZ登山に向った明治大学一行の隊長橋本清氏を招いてクック登山の模様などを聞いた。

一行四名(〇B一、学生三)は一月八日横浜を出港、途中神戸から乗船した長野岳連一行と共にシドニー到着の十二月三日まで、楽しい船旅をした。

昨年は学期末試験などで帰国の期限をおえられていたので、好天をつかめず、クックの登頂はあきらめたので今年は、出来るだけ滞在日数を多くするため帰国を飛行機にし又登頂期間を一月一日前後に目標をおくことにした十二月四日

クライスト・チャーチに到着後、翌日ノーマン・ハーディ氏、ヒラリー卿と面談出来大いに感激し、JACの近況などいろいろと聞かれたそうである。

NZ山岳会のメンバーはクライマーとしての誇りも高いし、事実四十才位になっても可成りばげしい登山を楽しんでいるところである。

特に感心させられたのはその所属の山小屋の整備され、清潔なことであつた。日本の山小屋の使用が特に悪いので、今更NZの山小屋を見ておどろくのはおかしなものであるが、その山小屋に世界的に有名な山の本がライブラリーとして、登山者のために備えつけられている点であつた。その他、寝具

炊事用具などはいちやもたないことである。一何んで日本人にはこういう習慣がないのであるのかと残念であつた。

クック登山については、クリスマス以降悪天に見舞われ、プラトリーハットに入つて以後、一週間吹雪かれた後、一月三日に試登したが、氷の状態悪く中止、六日、八日とそれぞれ登頂に成功。(第一回の記録、午前零時スタート、頂上八時、後三時三十分帰舎)

NZ登山で特筆すべきことは、そのアプローチの長いラッシュンタクティクであること。氷河、氷壁などの氷雪技術が可成り高度であること。従つて総合的にいへば強靱な体力と優れた技術が必要で、スピーディーな登山を行なわなければダメであるということである。

氷は固く、軽くて小さな日本のビッケルではね返つて役に立たず、時間ばかりかかって疲れてしまう。NZのメンバーがツルハシのようなビッケルを持っているのがわかつたことであつたが、そういうえばエベレストを登っているヒラリー卿のビッケルがやたらと大きいのを思い出した。

日本の登山技術で一番欠けているのは、スピードではないであらうか、いろいろ大変取獲の多い登山であり、学生中心の海外会合として極めて有意義であつた。

今後出来るだけ続けて行きたいとのことであつた。 大塚博美記

第八回 海外登山懇談会

〇三月七日(月) 後七・〇〇 JAC ルーム

〇テーマ「ブルー・アングス」

〇出席者 伊藤博夫、綿織英夫、佐村雄三、広谷精啓、田中米穂、松田柳子

〇ゲスト 芝浦工大 大江幸雄 エーデルワイス、松田柳子

〇概要 今春、ブルー・アングスに向う芝浦工大の大江幸雄氏とエーデルワイスの松田柳子さんにそれぞれ準備の状況や登山のねらいなどをうかがつた。

エーデルワイスの計画概要は、五月三日板倉登喜子隊長ほか六名はブラジル丸にて横浜出港、約二噸の荷物。リマ着後第一期は約三週間て高所馴化のため、カウヤラフ山群の登山を行なう。第二期はクスコで太陽の祭り、などの見学に一週間、後約三週間の予定でカラランラ(六一四七m)を登頂する。本尾根にテントを三つ出す予定、帰国は八月中旬頃。

故クロード・ユガン女史につづき女性としては第二登をねらうもので、日本からも女性だけの隊とし南米へは初めての計画であり、その成果が注目される。

準備された食糧、装備は女性らしい細かき注意と十分に検討された配慮がうかがわれる。トイレントなどはその片鱗と見てよいであらう。総経費六百万円。

芝浦工大一行は、加藤幸(55)隊長ほか六名。目的はワイワッシュのシウラチ(六二六五m)。ドイツ隊との同時期同率に向うため、予定より出発を遅らせる。ドイツ隊は一九六一年にここで二名死亡している。そのとらえ合戦を行なうべく、すべてヒマラヤ経験者の猛者は八、九名で隊を編成して意気込んでいるそうである。

芝浦工大隊はエンジニアの登山隊らしく、装具にはいろいろと道楽が凝っている。その一つは、用具の捲上げウインチ、その二は、クレパスを渡る網の打上げ発射機であり、ワイヤーのフイックスドロップのブレイキに使う、ブレイカーなどである。それらの用具の成果とむずかしい山の成功が期待される。

荷物は一噸、経費は約六百五十万円。☆本年度はこれをもってこの懇談会は一応打ち切らせていただきます。 大塚博美記

Journals arrived in January, 1966

1. Mountaineering, The Official Journal of the British Mountaineering Council, Volume IV, No. 8, Autumn, 1965.
2. Österreichische Alpenzeitung Folge 1343, September/Oktober, 1965.
3. La Montagne et l'Alpinisme, Octobre 1965.
4. The Canterbury Mountaineer Vol. 10, No. 34, 1964-1965, issued in October 1965.
5. The Journal of the Mountain Club of South Africa, No. 60, 1967.
6. 同上, No. 67, 1964.
7. Appalachia Bulletin, Vol XXXI N.S., No. 11, December 1965.
8. 同上, Vol. XXXII N.S., No. 1, January 1966.
9. Rivista Mensile, Vol. LXXXIV, No. 10, Ottobre 1965.
10. New Zealand Alpine Journal 1963 Vol. XX, No. 50.
11. New Zealand Alpine Journal 1964 Vol. XX No. 51.
12. New Zealand Alpine Journal 1965 Vol. XXI, No. 1.

Journals arrived in February, 1966

1. The Alpine Journal Vol. LVV, No. 311, November 1965.
2. Union Internationale des Associations D'Alpinisme Bulletin trimestriel, No. 18, Novembre 1965.
3. Der Bergsteiger Heft 4, 33-Jahrgang, Januar 1966.
4. 60 Jahresbericht, Akademischer Alpenclub Bern vom Nov. 1964 bis Oktober 1965.
5. Österreichische Alpenzeitung Folge 1344, November/Dezember 1965.
6. Mitteilungs des Deutschen Alpenvereins, 2-4, 17-Jahrgang.

März-Juli, 1965.
7. Appalachia Bulletin Vol. XXXII N.S., No. 2, Feb. 1966.

日本登山学校春季授業

四月五日(火) 四月二六日(火) リーダーとなる人々(日高信六郎)、岩登りABC、登山保険、丹沢ポッカ訓練、春山の気象、岩登り術、地域研究

五月三日(祭) 五月三二日(火) 谷川岳合宿、登山憲章解説、西山会報告、台湾の山、装備と写真研究、鹿沼の岩場行、ソ連の遭難対策(袋平)

六月二日(木) 六月二三日(木) ビッケル、ザイルの研究、世界の山(吉沢一郎)、ヒマラヤの成因とその地形、岳人の歌、中央アルプス縦走、岳人伝、その他 教場・神田須田町交通博物館 責任者・川崎隆章 東京都大田区調布嶺町一ノ一四〇 電話(71)四〇四六

海外新着雑誌紹介

New Zealand Alpine Journal 1965 Vol. XXI, No. 1

最近ではニュージーランドの山へ出かける隊も増え、それらの隊にとってはこのジャーナルは最も重要な文献となっている。そのジャーナルが二年振りに到着した。

巻頭記事は例のヒラリー学校に参加してタムセルクに登った R. Stewart による Himalayan Schoolhouse Expedition - Thamsenku 写真と対比したルート図が、登攀の困難さを物語っている。その他に海外での記録として※

※ E. Cotter による Once Upon a Cordillera C. Put と題した一九六四年度ブルーアンテス・アルパ・マ・周遊の記録。C. Put による The Ascent of Big Ben と題した南極圏のハード島遠征記録。D. Butter による Traverse of the Aiguille de Grepou, H.H. Clifford による Fine Weather in the Ruwenzori 等がある。

Vol. XXV, 1964

待望のヒマラヤン・ジャーナル一九六四年号が到着した。本来ならば七月頃に着く等のもので、本会の住所が変ったために、日本についてから、迷いに迷いぬいて漸やく、年の瀬もおしまってから届いた訳である。

本号は久しぶりに紙もよく、写真の印刷もよく、内容も充実している。以下遅ればせ乍ら簡単に内容を紹介してみよう。

巻頭は一九六三年アメリカ・エベレスト隊の登頂記録。これは A.J. 一九六四年から reprint したものである。以下ヒラリーらの一九六三年の School-house Expedition, 四つの日本隊の記録 (ビッグホワイトピーク、モンブル、サルトリロカンリ、オーストリ隊による一九六三年のダウラギリ II 峰、ヒンズークシ、インド隊による、アンナブルナ III、ナンドデビー、サセールカンリ、一九六三年の第三次ポーランド・ヒンズークシ遠征隊 P. テーラーによるランタン・ヒマール、ヘルヒコフアによるナンガパルバット、ディアミル壁。英ソ合同パミール遠征。ペティグルーによるクルー・プモリ、他に K. ビスワスによるヒマラヤの薬用食物と題する報告等二

十の報告が収載されている。

虎スベディン・ノーツ欄には Tiger Badge Awards と題して、メージンの Local Secretary S.M.J. Cheney がまとめた。一覧表は大変に参考になる。これによるとタイガーバッジ授章者は五十一名でこの中故人として記録されている者が十五名いることがわかる。

追悼欄には一九六二年のエベレスト隊の隊長であった Major John Dias クルーの H. M. ベン少佐、ロングスタッフ氏等、本会と親しかった三氏の名がみられることは寂しい。(松田)

Der Bergsteiger Heft 4, 33-Jahrgang, Januar 1966

会報二四五号にてお知らせした様に今年一月号より購入することにした Der Bergsteiger が到着したので紹介する。

本号には Horst Schindhaber による Monhil Sar (7342m) の記録がルード写真で解説して掲載されている。他に Les-Courtes, Greshorn の二つの北壁が紹介されている。(松田)

Österreichische Alpenzeitung Folge 1343, September/Oktober, 1965

オーストリア山岳誌通巻一三四三号は久しぶりに充実をみせている。巻頭は G. O. デイレンフルト博士による Die höchsten Gebirge der Erde と題してのアジアの高峰概説。

次ぎ Dr. Rudolf Pishngen による Steirische Hindukusch-Expedition 1964 の記録。一九六三年にシヤック縦走を試みた一行は、一九六四年には七、三三三 m の Ufren Zom, 七、一一一 m の Shachaur, 七、二二五 m の Nadir Shah (前二者は初登、Koh-i-Nadir Shah は第三登) の三つの七、〇〇〇 峰を仕とめた。次ぎ Hans Schell による Monhil

Sar (七、三四二 m) の登頂記録、地図、写真が素晴らしい。

書評欄には山岳五十九年号が J.A.C. のよき理解者である A. Demberger 氏により詳しく紹介されている。(松田)

ルーム日誌 41年1月

- 8日(土) 土曜会
 - 11日(火) 常務理事会
 - 12日(水) 東京支部委員会
 - 13日(木) 理事・評議員会
 - 19日(水) 支部三水会
 - 21日(金) 海外連絡委員会
 - 22日(土) 土曜会
 - 25日(火) 婦人部世界の山研究会
 - 27日(木) 学生部委員会
 - 29日(土) 土曜会
- (今年からルームの利用状況を知って頂くためにルーム日誌をのせることにしました。この他にルーム以外の場所で開催されている集也会有りますが省略しました)(松田)

ルーム日誌 41年2月

- 1日(火) 図書委員会海外資料整理
 - 2日(水) 東京支部委員会
 - 3日(木) 理事・評議員会
 - 5日(土) 土曜会
 - 7日(月) 海外登山懇談会
 - 9日(水) 図書委員会
 - 12日(土) 土曜会
 - 15日(火) 婦人部世界の山研究会
 - 16日(水) 東京支部三水会
 - 18日(金) 海外連絡委員会
 - 19日(土) 土曜会
 - 23日(火) 婦人部委員会
 - 25日(木) 学生部委員会
 - 26日(土) 土曜日
- (以上)

山岳部報寄贈のお願い

図書委員会

図書委員会ではルーム図書室の充実の一環として、大学部報バックナンバの欠けているものを補充していくことになりました。

就きましたは会員各位の中で左記部報をお持ちの方がございましたら御寄贈又は、御譲り載しますれば幸と存じます。

記

- 北大山岳部報 7号
 - 東北大学山の会々報 2号
 - 発行行、1、4、11、12、15
 - 立教大学山岳部報 1、4、9号以降
 - 針葉樹 1、4、7、9、10、12号
 - リニクサック 1、2、7、10号以降
 - 炉辺 1、6号
 - DAS EDELWEISS 1、2、5、7、10、12
- 以上

会員名簿のお願い

山岳十四年二号によれば、大正九年三月現在の会員七四九名を以て会員名簿を発行した記録がありますが、現在会にはこの名簿がありません。会員各位の中でお持ちの方より、御寄贈頂けますれば幸と存じます。何卒宜しくお願い申し上げます。(庶務担当理事)

ヒマラヤでスパイ

世界で初めてエベレストを征服したニュージランドの登山家サー・エドモンド・ヒラリーが一九六〇年に行なったヒマラヤ探検は、雪男の探索よりも中国をスパイすることが目的だった。一とソ連の国際問題週刊誌「新時代」最近号が非難した。

同誌は「このことはサー・ヒラリーがその著書の中で多かれ少なかれ認めている。ネパール当局は西側の探検隊

がスパイ活動をするので、エベレスト登山を事実上禁止してしまつた」と述べ、さらに「サー・ヒラリーは米國とニュージランドのロケット専門家を伴っていた。探検隊費用の大半は米空軍がまかなつた。彼らのおもな目的はヒマラヤでの中国ミサイル実験にかんする情報を調べることだった。だから彼には雪男を捜す時間がなかったのだ」と主張している。(東京41:131 ロイター共同)



図書紹介

山・スキー・みち
続・垂直と水平
の道

渡辺兵力

この本は「続・垂直と水平の道」という副題が示すように、昭和三十六年以後に著者がいろいろの山に、時に応じて書いたものを集めて一冊にしたものである。

私はこの本を読むことによって渡辺君のバルトロ・カンリー以外の行動や山歴を初めて知ることが出来た。

一九四四年生れといえれば私は、小学校・ブラス中学校(昔の)分だけ後になるが、彼の学生時代は実に恵まれた環境にあったらしい。彼の山登りが素直にスラスラと伸びているのはこのためである。

その故でもあろうか、彼の書いていることには、反流を感じることが殆んどない。私のような人間からみると実に、羨ましい人柄に思える。だが余りにもソツがないので頼りないという感じは多少ある。

彼が高木正孝と同じ学校で同じ頃山を歩いていたこともこれで知った。故高木氏は、この本にもそれとなく触れているような気がするが、ひどく複雑な人であつたらしい。私は近頃ウィンバーの伝記を訳しているが、高木君とウィンバーにはあるところで共通な点何処と指摘は出来ないが、があるような気がする。彼も華やかな山登りしただけで結局は薄幸な登山家であつたようだ。最後にこの本で目立つのは、校正洩れの多いこと、独自の英独合成語があり、文字の使い方に統一性のないことなどである。

四〇・二月発行。泰文館、一七四頁、三二〇円。(吉沢)

上信越高原国立公園

苗場・谷川・岩倉集成図

本会越後支部長、藤島玄氏編集による五〇、〇〇〇分の一の集成地図である。

藤島氏は既に、一九六二年に飯豊連峰大地図を、一九六三年に越後三山集成図、一九六四年に朝日連峰案内地図を編集しており、今回の集成図はこのシリーズの第四集に当たるものである。

この集成図は国土地理院の五万分の一図幅の越後湯沢・四万・苗場山・岩倉山の全部と十日町・松之山温泉・高田東部・飯山・中野川幅の一部が包含され、東は巻機山・谷川岳から苗場山・岩倉山、西は毛無山・志賀高原に至る上信越高原国立公園北半の広範な地域が図幅に集成されている上に、国立公園境界線、果市町村境界線を色分けし、且つ五〇〇米毎の等高線を色別して見易くしており、その上、沢の名称と山名、山小屋、登山道、スキー・リフト等、最新の情報をもとに採録してあるので、登山用地図としては実に便利にできている。その上今回のものは五万分の一の地図の上部が北なので、当然なことながらこの点も便利である。

その他、裏面には、山小屋一覧、登山コースと対比した断面図、行程図の他上信越高原国立公園の概観・地形・地質・気象・動物・植物・人文・代表的24コースの案内・地図の読み方・国立公園・谷川岳登山十訓まで集録してあり、この地図一枚で上信越高原国立公園のすべてがわかる様に網羅されている。

さすがに藤島さんの編集になるものだけに、正確である。会員各位の御利用をおすすめする次第である。昭和四十年、新潟県発行。頒価一五〇円。希望者は送料二〇円を添えて山岳会事務所へお申込下さい。(Y・M)

日本山岳会学生部年報

No. 2 一九六四

学生部の年報一号については、会報二六六号に紹介されているが、一九六四年度の年報が、この度委員長長の尾上昇君の努力により刊行の運びとなった。

本年度は本会の学生部に対する熱の入れ方を反映してか、学生部の活動も目まざましく、この年報第二号の内容にもそのムードがにじみでている。巻頭は何時になっても学生部に対する情熱を失ってはおられない谷口現吉先輩の「あの向うが見たい」と題する古文、ついで日大尾上君の「学生部」のことと題する委員長としての一年間の感想、原稿欄は加藤泰安氏の七月五日学生部例会に於ける講演の要旨、山登りでは「文化的行為」であり、あくまでもインデビジュアルなものであるとの論議、次いで学生部担当理事村木潤次郎氏が「大学山岳部に期待すること」と題して、大学生の山登りに対する考え方、大学山岳部の実体、学生部の将来に対しての希望をのべ、これに對し一九六五年の委員長校学院大学山岳部の錦織英夫氏が「正統性への回復」と題し山と人との新たな関係について問題を提起している。研究・調査の欄は「大学山岳部の実態」と題してアンケートで集めた大学山岳部の実態をグラフでつづけてユニークな発表がみられ、又若手OBによる座談会も、苦勞して整理したものだけに参考になる点が多い。

記録欄には学院院大学山岳部による一九六四年のローガン登頂と、明大山岳部による積雪期剣岳八ツ峰縦走という国外、国内のすぐれた記録を紹介している。八ツ峰を二俣から完全縦走した記録は立派な業績である。資料欄は加盟四十二校の昭和三十九年度の積雪期登山記録を集成している。これを一読することにより各校の積雪期登山に対する考え方や傾向を知ることができる。

学生山岳部が社会的に種々と批判されている時だけに、この年報のもつ意義も大きいと思われる。学生山岳部の実態を知り理解して頂くために学生山岳部以外の者にも一読をお薦めする次第である。

尚表紙デザインは一号同様広羽清氏を頼むだけにスッキリしている。最後は欲をいえば誤植の多い点が残念である。

A5版横組一〇八頁。昭和四十年十二月十五日発行。頒価二四〇円。希望者はルームへお申込下さい。(Y・M)



常務理事会

日時 三月一日午後七時
場所 本会ルーム
出席者 加藤、辰沼、飯野、松田
理事

- (1) 定款改正点の確認
 - (2) 昭和四十一年度予算案
 - (3) 通常総会開催日時、場所
 - (4) 来年度役員改選の件
- 三月三日の理事・評議員会にかける以上四項目につき、原案の検討を行った。

三月理事・評議員会

(三日・ルーム)

出席者 松方会長、三田、渡辺副会長、理事・加藤、辰沼、大塚、村木、松田、飯野、宮下、川崎、杉浦、竹田、田村、川上、評議員・吉沢、村井、青木、藤井、石原(憲)、中田、監事・松本、東京支部・沼倉委員(以下委任) 藤島(敏)、高山

- △議事
- (1) 定款改正の件
 - (2) 家族会員

「会員の家族(配偶者ならびにジュニア)は年会費五〇〇円を納入することにより家族会員として、本会で主催する集会及び山行に、出席又は参加することができる。但し家族会員は、議決権、選挙権、被選挙権を有せず、刊行物は頒布されない。ジュニアの会員が成年に達した時は、正規の入会金、年会費を支払い通常会員としての手続きをとらなくてはならない。但しジュニアの会員※

※が成年に達した場合といえども、在学中の者は、卒業する迄この制度を延長することが出来る。

前回の理事会での意見を成文化すると右の様になるが、これでは当初考へた家族会員の意味(刊行物及び集会通知は配偶者の場合など一通でよいから、その分を割引いて欲しいという提案)から大分離れてしまうという提案の問題として現在十組程在籍している夫婦会員の中心には、この制度を希望している者は少ないので、今年は見送ることを決める。

②入会年度の刊行物について
定款第七条を希望する者は会員二名(うち一名は原則として本会役員、評議員、又は支部長であることを必要とする)の紹介により所定の入会申込書を提出し、理事会の承認を受けなければならない。

入会の承認を受けたときは、直ちに入会金を払込み、所定の手続きを行うものとする。但し入会の当該年度のみは、年会費を納入することなく、入会の月より会報の頒布をうけることができる。

入会承認の通知後一ヶ月以内に前項の手続きをしないものに對しては入会承認を取り消すことがある。

③以上二点を訂正の上、字句を整え通常総会に改正原案として提出することを決める。

(2)昭和四十四年度予算案検討の件
二月の理事・評議員会に原案は提出されており、これにつき、山日記印税の減少理由等につき質問があったが、原案通り承認され、通常総会にかけることとする。

尚東京支部の支部費の問題につき石原支部長より説明あり、東京近郊在住者が、地方在住者に比して四〇〇円高いのは、ルーム維持費であり、支部費と

しては他支部同様一〇〇円しか還元金がないので、これでは運営困難であり、これとは別に一〇〇円を支部費として徴収したい旨提案あり、承認された。

(3)通常総会開催の件
日時 四月二十三日四時(五時より懇親会、尚これに先立ち三時より東京支部総会を開催)
場所 交渉中、未定
(4)役員改選の件
任期のある、正、副会長、折井、村井、評議員、野口、監事の他は全役員、評議員が改選される。これについて、加藤理事より常務理事会案が説明され意見が求められたが、特に意見もみられず、この原案を総会にかけることとする。

(5)各支部報告 (中田)
①富山支部
四月四日に支部総会を開催する予定、今年は支部創立二十周年に当るのでこれを記念して、富山出身の田部名誉会員、河合永年会員を支部顧問に推薦したいと考えており、既に両氏より内諾を得ている。

②東京支部 (石原)
二月十九日、都岳連加盟の問題につき支部総会を開催し(九頁参照)都岳連へ正式に加盟した。

③越後支部 (渡辺)
三月十三日の県境縦走りリーダー研修会並びに四月二・三日の県協会の春山講習会に講師派遣要請があり、前者は藤田住宅会員を推薦、後者については入会人を常務理事会に一任することとする。

(6)その他議事・報告事項
①富山県登山届出案例の件(加藤) 薦の件。
左記各氏を取敢えず推薦、委員は必要に応じて増員していくことにする
加藤、辰沼、村木、大塚、飯野、松田、吉沢、折井、村井、山崎

倉知、竹田、宮下、丹部、折井、山下
③学生部アスカ・カナダ登山隊に對し装備貸出の件
装備貸出し規定があるが、本会学生部の計画であるので、この適用を行なはないで貸出すことを承認した

④立山頂上社務所の件 (村井)
昨年九月建築工事に、かつ雄山頂上の社務所につき、富山県自然保護協会会長、牧野平五郎氏より出された要望書によれば、
○新築された建物の一部を模様替へすること
○第二次工事を中止すること
○便所その他を改善すること
以上の様に反対運動により、大分改善されることになる模様である。

⑤次回理事会は四月七日(木)とする。

尚本日の理事・評議員会の席上、廻された山内東一郎氏火災見舞金カンパは八〇〇〇円に達した。以上

常務理事会
日時 三月十七日(木)午後六時三〇分
場所 本会ルーム
出席者 加藤、辰沼、村木、松田各常務理事、坂本矩祥氏

(1) 通常委員会決定の件
会場を青山のドイツ東アジア研究協会と決定、総会通知発送の準備にかゝることとする。

(2) 六十周年記念展覧会の件
実行委員長折井健一氏と決定。
福島支部春山講習会講師派遣の件川上理事と決定。

(4) ネパール地図の件……検討の結果本会での刊行は困難であるので、日米協会に依頼することとする。

(5) 山日記印税の件
発行部数の減少に伴う減収に對し、対策を検討する。以上

東京支部臨時総会
日時 二月十九日(土) 午後二時
出席者 九七〇名(季任出席九四二名を含む)
議事
東京支部の東京都山岳連盟への加盟に関する件。
石原支部長より、松方構想に則った日本山岳協会結成への意向により東京都山岳連盟加入を必要とする現在迄の経過の報告および説明があり、質疑応答の後、議題に關し全員異議なく承認可決した。以上

東京支部会務報告
三月二日(水)役員会
出席者 石原・沼倉・富田・小味・関口・村井・野村・広谷・鈴木和・松永(安彦・折井・加藤)
1 報告事項
(1) 都岳連加盟申し込みに関する件
二月十九日開催の総会決議にもとづき、都岳連に對し二月二十七日正式加盟申し込みを行った。

(2) 昭和四十四年度事業報告
(3) 昭和四十四年度会計報告
2 議事
(1) 都岳連評議員に関する件
暫定的に沼倉委員長を推挙する
(2) 都岳連加盟に到る経過を会報に掲載する件
(3) 支部費徴収に関する件
新たに支部費百円を本部会費と一諸に徴収したい。
(4) 来年度事業計画に関する件
(5) 来年度技術講習会計画の件
(6) 新年度役員推薦の件
以上 (松永)

第十一回図書委員会
三月九日 於ルーム
小林、山崎、古川、大橋、古川、倉知、鈴木、武田、松田

○和書受入れ報告、別記三冊、書評依頼先を決める。(大橋)
○日本地名発音辞典の件
NHK発行の地名発音辞典(関東・甲信越)が統刊されているので会で購入したい。(大橋)
○日・ネ辞典・ヘイン全集も会で揃えるように
○洋書、五月の会報が二五〇号となるので併せて洋書目録を別刷で出すべく欠本を整理中 (倉知)
○選定図書および解題、再検討して追って会報の別刷りしたい、原稿を山崎氏に廻す。(大橋)
○海外登山、アルバム整理経過報告。(古川)

四十年受入図書 (40・41・42)
(凡例) ①書名、②著者、③発行所、④寄贈者
①バルトロ・カンリー (250) ②東大カラコロム遠征隊③NHK④NHK
①心に山ありて②今井雄二・喜美子③同心社④著者
①日本百名山②深田久弥③新潮社④著者
①思い出の記(秩父宮雅仁親王文集) ②童星閣④秩父宮家
①ヒマラヤの高峰 No. 1 No. 4 ②深田久弥③雪華社④著者
①われ北壁に成功せり②服部満彦③実業之日本社④著者
①チャラン②岡本文夫他③BBM社④著者
①ヨードル入門②樺山武弘③朋文堂④著者
①奥飛騨の山と人 ②岐阜県山岳連盟④松田雄一
①ニユーギニア高地人②本多勝一・藤本高嶺③朝日新聞社④著者
①マチャブチャリ②W・F・ノイス、深田久弥訳③文芸春秋社④訳者

①山は屋上より②足立源一郎③朋文堂
④著者。

①白馬岳②小野尚俊

①アラビア遊牧民②本多勝一・藤木高
嶺③朝日新聞社④著者。

①川内山とその周辺②笠原藤七③著者
④雲の中⑤九ヶ月⑥E・P・ヒラリー著

丹部節雄訳③B・B・M社④発行所。

①エベレスト登頂記②J・アルマン著
丹部節雄訳③B・B・M社④発行所。

定期刊行物

・岳人(1966-3, No. 218) 東京中日
・アルプ(1966-3, No. 97) 創文社

・あしな(99) 山村民俗の会

・山嶺(1966-3, No. 43) 東京野歩
路会

・O・M・Cレポート(1966-3, No. 196)
奥多摩山岳会

・山毛榉林(No. 111~113) 広島山の
会。

海外連絡委員会

日時 二月十八日(金) 六時三〇分
場所 本会ルーム

出席者 日高、近藤、袋、丹部、吉沢
松田、芳野

議事

(1)ネパール地図発行の件
関西支部の阿部、平林、薬師氏等
が中心となって作成した二十五万分
の一の地図は四枚一組、一、〇〇〇部
作成することを検討することにした
(担当Ⅱ吉沢)

(2)台湾登山問題

(3)来年度委員推薦の件

(4)其の他海外登山に関する情報交換
(以上)

海外連絡委員会

日時 三月十八日(金) 六時三十分
場所 本会ルーム

出席者 吉沢、近藤、芳野、松田各委
員。

議事

(1)山岳六十年号海外発送報告
外国のジャーナルの送付状況とし
ての対策。

(2)海外登山技術研究会について
六十周年記念展覧会での海外問題
の取扱方について検討

(3)其の他意見を交換

上

創立六十周年記念展覧会
実行委員会

日時 昭和四十一年三月十日
場所 本会ルーム

出席者 折井、山崎、辰沼、沼倉、倉
知、竹田、宮下、小方、松田

議事

六十周年記念展覧会は六月十一日か
ら二十二日迄、東京池袋西武百貨店で
開かれるが、この展覧会についての第
一回目の実行委員会を開催し、左記の
点を決めた。

(1)実行委員長 折井健一氏

(2)アシスタント 山崎、松田

(3)委員の分担

(4)具体案の検討

(以上)

(七頁下段より)

だが、例年主役の小林義正氏がこ
ととは引っこしをされ大なる蔵書
の整理がついていないためもあつ
て、小生のとほしい手持ちの本が
動員される羽目になった。

槍ヶ岳に関する文献は全部ひろ
い上げたら大変なものになるだろ
う。重要と思われる初期のものに
重点を置いてビックアップしたの
が本稿である。若干は間接資料に
よったものもあるが、ほとんどは
直接原典に当ってリストアップし
た。(昭和四十年十二月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

(昭和四十一年三月)

世界山岳名著全集 全 12 巻

(別巻 1 巻)

編集委員 吉沢一郎・横川文雄・近藤 等・安川茂雄

「日本山岳名著全集」に続いておくる世界の名著!

第1回配本
(6月中旬)

(第8巻)

マッターホルンの暗い壁
グランドジョラス北壁

ヒーベラー／横川文雄訳
△版權取得・本邦初訳
フレンド／近藤等訳
△版權取得
ランベール／安川茂雄訳
△版權取得

山に闘う

① シルクロードの山と谷
ブルース／訳者未定
ヒマラヤ漂泊

⑦ K登頂
デジオ／近藤等訳
ジェルヴェステイ／青柳・青木訳
山、わが生命

② ウインパー伝—栄光と悲劇の人—
スマイス／吉沢一郎訳
ロングスタッフ／望月達夫訳

⑨ エベレスト登頂
マリ／山崎安治訳
はるかなるエベレスト

③ わが山の生涯
ギド・レイ／青木枝朗訳
マッターホルン

⑩ ブロード・ピーク
ピエール／安川茂雄訳
ヒマラヤ、わがよき仲間

④ アルプスの高嶺にて
シュミット／ビーターズ／横川文雄訳
ザイル仲間

⑪ エクアドル・アンデス
ティルマン／吉沢一郎訳
赤道の雪

⑤ 山!
マドシニカ／千坂正郎訳
山における若き人間

⑫ 八千米の上と下
ヘルマン・プー／横川文雄訳
白嶺

⑥ アイガー北壁に挑む
ウエルツェンバッハ／高木正孝訳
わがアルプスの北壁

(別巻)登山百年史
アーノルド・ラン／訳者交渉中
●第2回配本(巻2)・7月15日以下
毎月配本

佐伯富男著 4月末日刊
あるガイドの手記
(As 箱入 価五五〇円)

あかね書房
東京都千代田区西神田二の一

(二頁五段より)

本会に於ける東京支部の活動は本来のクラブとして、益々活況に、また本会の中心をなす支部として従来に増した活動を続けていくことは論をまたないところで、六〇年に亘る輝かしい伝統の上に本会にはさらに発展を続けていくことをかたく念じてこゝに報告を終ります。

●会報バックナンバー

会報二四七号にて本会保存用として欠号の提供方お願い致しましたところ藤島敏男、日高信六郎、藤島玄、安川茂雄、田辺主計、山崎安治、山本朋三郎、吉沢一郎、古沢肇、渡辺公平、成瀬岩雄、石井貞吉、武山良次、杉原八百樹、伊藤弥十郎の各氏より多大の御協力を戴きましたことを紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

お陰様にて大分整いました。が尚左記号が不足しておりますので余分をお持ちの方はお譲り下さいます様重ねてお願い申し上げます。

155 156 157 158 160 187
188 190 198 202 203 204
205 211 214 229
尚会報二四七号にお知らせしました頒布可能なバックナンバーの中、左記各号は品切れとなりました。

139 134 135 142 144 163
179 182 184 185 201 209
212 244 245
●「山岳」についてのお願
49年 50年 52年 54年 55年 56年
右記各号についても余分をお持ちの方はルームの保存用として、御提供戴けますれば幸と存じます。(松田)

【編集後記】二五〇号までの索引は

次号と同送の予定。槍ヶ岳の穂刈三井雄さんも遂に逝った。淋しいことである。読みにくい原稿、編集のしにくい原稿は面倒なのでどうしてあと廻しになる。成るべく原稿は丁寧に書いて下さい。そろそろ私の編集もマンネリになった。望月君の見解をこの次の巻頭に出さしてもらおう。(吉沢一郎)

昭和四十一年四月十日発行

東京都渋谷区神宮前

三ノ三 外苑コーポ内

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 吉沢一郎

頒価五十円

印刷所 東京都港区赤坂溜池五番地

株式会社 技報堂

登山における
人体工学追求の
勝利!!

画期的な新製品
シャモニー
キスリング
株式会社 サクラヤ

TEL (861) 0933-5 (851) 3356-8

